

ア！安全・快適街づくりニュース

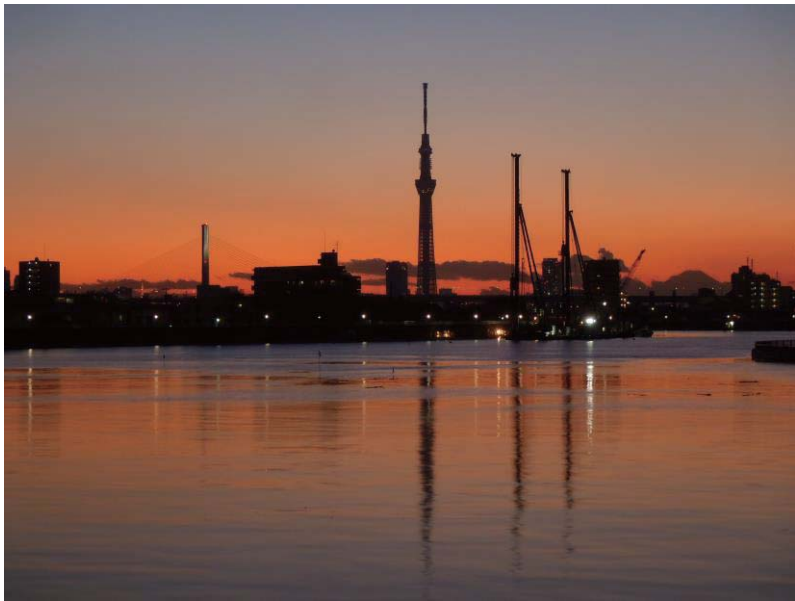
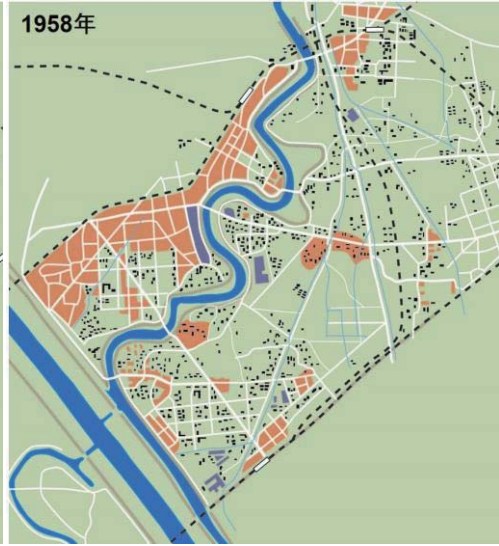
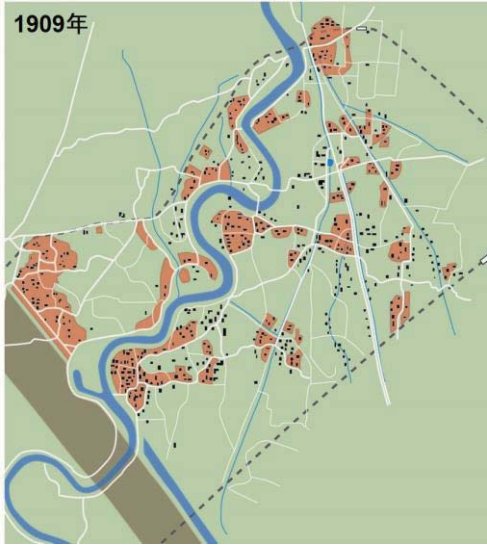
2019 年(令和元年)6 月 Vol. 25

2018 年度 総集編

人を育み川 中川

朝日映る
空の青い山
夕日に染まる
スカイツリー
老舗の土蔵
9はむ街
森羅万象
万葉の昔から
人を育み川
中川
如重 石川金治





目次

はじめに	3
NPO ア！の最近の活動..... 成戸寿彦	3
平成 30 年度の活動結果について..... 宇賀俊夫	6
理事から	9
浸水リスクと賢く共生する親水都市を目指して	
～動き出した「浸水対応型市街地」構想～..... 加藤孝明	10
浸水対応型市街地の実現に向けて～親水文化を育てる～..... 土肥英生	15
倉敷市真備町の洪水被害を視察して..... 中村仁	16
新小岩北地区連合町会長として..... 青柳勇	17
輪中会議と木曽三川輪中..... 中川榮久	18
「災害とレジリエンス」も「てんでんこ」も..... 渡邊喜代美	20
輪中会議	25
第 12 回輪中会議 プログラム..... NPO ア！	26
第 12 回輪中会議トピックス ～議事録から～..... 25号編集会議・編	29
協議会メンバー代表 挨拶.....	30
第 1 部 多様な活動報告.....	31
第 2 部 親水・浸水×まちづくり×ひとづくり.....	47
第 12 回輪中会議を振り返って..... 塩崎由人	53
輪中会議への期待..... ヤスミン・バタチャリヤ	54
輪中会議のこれから..... 渡邊喜代美	55
学校から	57
地域防災ボランティア部の活動..... 高田歩	58
連携の大切さとこれから OB として活躍できること..... 小豆嶋勇誓	62
地域社会の中での「アクティブラーニング」..... 南貴久	63
防災教育..... 堀内康博	68
地域の方々から学ぶ..... 渋谷英一	69
水辺フェスタ..... 山上忠・南貴久	70
地域から	71
東京東部低地帯 地盤沈下の原因と歴史	
～「古井戸」復元を機に 改めて振り返る～..... 南貴久	72
古井戸の保存について..... 影山秀晴	74
西新小岩五丁目町会の活動報告..... 町山光司	76

浸水と親水 ～川と共に暮らす～	青木美紀子	78
水害時避難訓練について	塚田剛士	79
地域防災と消防団	中村隆三・茂木敦史	80
かつしか FM 防災番組 生放送中！	葛西優香	82
たまり場カフェ・葛飾	松島義雄	83
初めての「輪中会議」に寄せて	鈴木ひろみ	84
輪中フォーラムに参加して	久保欣一	85
上小松町会会館の建て替え ～歴史とともに振り返る～	協力：上小松町会	86
行政から		91
川の手・人情都市「かつしか」の実現に向けて（2）	情野正彦	92
江東 5 区大規模水害ハザードマップを作成しました	大田聖家	94
高規格堤防整備の推進に向けて	塚原千明	95
平成 30 年度 東新小岩七丁目町会 「犠牲者ゼロ」の実現に向けたワークショップ」	東新小岩七丁目町会	96
事務局から		101
NPO ア！のホームページリニューアルについて	古川修	102
平成 30 年度（上期）葛飾区地域活動団体助成事業 「親から子に語り継ぐ大水害時の避難について」（報告）	増澤一朗	103
ボートは強い味方	山上忠	106
会員から		109
初参加者から見た活動について	前川浩平	110
民間の力を生かした防災力向上に向けて	金裁澁	111
注目されています！ 葛飾	NPO ア！	116
編集担当から		117
表紙・裏表紙の写真の解説	25 号編集担当	118
新小岩北地区における取り組みと系譜（年表）	NPO ア！	120
表紙の書の紹介 / 編集後記	25 号編集担当	126

 P.O.O.

この記号は、他の関連記事・写真への参照を示しています。

新小岩北地区の活動は互いに関係し合い、重層的に発展しています。ぜひ、ページをあちこちめぐりながら、その関係性を感じてみてください。

NPO ア！の最近の活動

成戸 寿彦

NPO ア！安全・快適街づくり 理事長

我々の大切な機関紙であるこの「街づくりニュース」も、皆様方の活発なご投稿をいただき、年々内容が充実してきています。執筆のご協力に、心から感謝申し上げます。

さて昨年の冒頭のご挨拶では「NPO ア！の目指すもの」を再確認させていただきました。

そこでは、『設立当初は河川管理者が行うスーパー堤防整備事業を契機に、この地域が「安全で、水と緑と安らぎのある東京一番の街」になることを願った活動が中心であったが、加藤研究室と NPO とのその後の研究・活動で、この地域の安全を確保する選択肢はスーパー堤防だけではないということ及び「浸水」以外の川の持つもう一つの側面「親水」にも目を向けた活動を行っている』ことを確認しました。

したがってホームページも、そうした活動に沿った内容に変更する必要があるとの思いから、昨年の途中より作業に取り掛かっているところです。この変更は実に膨大な作業量になりますので、キャドセンターの古川さんをはじめ会員の皆さまのご協力を得て取り組んでいます。現在着々と進めていますので完成までいましばらく時間をいただきたいと思います。 P.102 古川さん報告

さて今年は新年早々、突然の発表で驚かされました。「荒川直轄河川改修事業（荒川高規格堤防整備事業（西新小岩地区）」が1月10日、国土交通省関東地方整備局より公表されたことです。一週間後の事務局会議で青柳連合町会長より資料をいただき、大成化工の所であることが確認できました。私も加藤先生も、葛飾区で行っている「浸水対応型市街地構想」委員会のメンバーとして、浸水に対応した市街地のありかたを模索している段階でしたので、一層おどろいたわけです。

しかし事情はどうあれ、NPO として地域住民の皆さんと行政との間に立ってお役に立っていききたいという思いは当然持ち続けていますので、そうした立ち位置で今後も活動してまいります。

そのために提案したいのは、事業者と関係する住民の話し合いを円滑に進めるために、住民の代表の方に加えて第三者としての学識経験者及び関係行政を加えた「協議会」をできるだけ早く設立することです。その「協議会」のとりまとめ役は、長年この地域にかかわってきた加藤教授をおいてほかにはないと思い

ます。

この事業が完成すればこの地域に高台が生まれ同時に低地帯と河川堤防が平面で結ばれますので、地域の安全にとっては多大な利益になります。

しかし反面では、この事業には様々な問題点も存在します。最も大きな問題は、現在稼働している都道の扱いでしょう。上下二段で存在する通過都道と地域都道。これをどのように扱うかは、広域の利便性と共に地域の生活とも密接な関係が出てまいります。

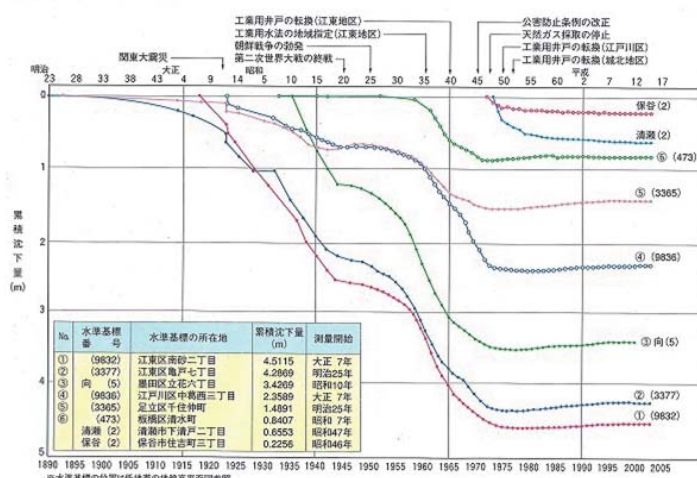
また堤防とほぼ同じ高さ（ $1/50$ の勾配で低下はしますが）で土を盛った場合、地域との法面がどのように処理されるか、またそうした土をどのように運ぶかも地域の環境に係りますので関係する住民の皆さんにとっては関心のあるところでしょう。主なものだけを上げましたが、こうした問題点を決まってから地域に示すのではなく、（案）の段階からお示しすることで結果的にはスムーズに事業が進められる事例を多く見てまいりました。関係者による「協議会」の早期の設立を、ご提案するゆえんです。

もう一つ申し上げたいのは、「古井戸」の復元です。

この「古井戸」は、1938（昭和13）年に東京府第四道路出張所において掘り抜き、その8年後に東京都第五建設事務所（名称変更、五建と略称）により60mに掘り下げられた、と銘板に記されています。まさに地盤沈下が急激に進もうとしていた時期です。

☞ P.72-73 地盤沈下の歴史

その後の地盤沈下の実態や抑止効果などについては別項で詳しく述べられますが、時が経過したなかでもこの「古井戸」は地盤沈下の生き証人として五建の庭で地面から突き出たままの形で保存されてきました（写真参照）。そして五建の建て替えの話が出るに及び、2010（平成22）年10月東京都知事と葛飾区長に保存願が提出され、十数回に及ぶ「検討会」を経て、2012（平成24）年3月、



地盤沈下経年グラフ



「古井戸」
(荒川下流河川事務所 提供)

葛飾区有形文化財に登録されました。この「古井戸」は地盤沈下の生き証人であるとともに我々がこの地域で目指す「浸水対応型市街地形成」の原点にもなる貴重なものであります。

さて五建の建て替えの間、この「古井戸」は東京都土木技術支援・人材育成センター（技術センターと略称）において丁寧に保存され、また五建の新庁舎の完成が近づくにつれその復元のありかたについて両事務所から丁寧な説明と相談を受けました。そうした動きに対して当 NPO としても、東京都建設局及び両事務所にお礼に伺っています。☞ P.74-75 「古井戸」の保存と復元

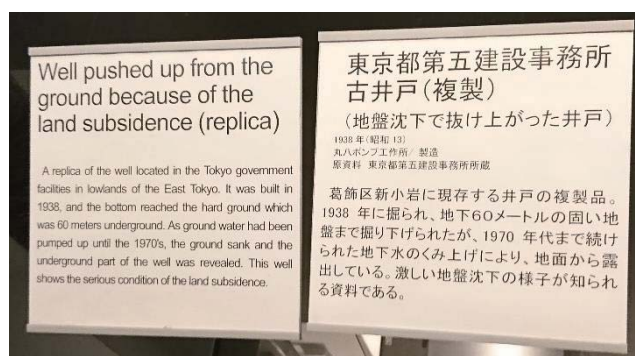
さて五建の新庁舎への移転は本年 8 月下旬から 9 月上旬にかけてと伺っていますので、一般の目に触れるのは 10 月に入ってからというところでしょうか。そこでご提案したいのは、「古井戸」の保存に重要な役割を果たしてきた「新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」の主催において復元セレモニーを行ってはどうか、ということです。

地盤沈下の生き証人としての「古井戸」は、拡大を続けた時代の東京の公害の一つとして、江戸東京博物館にレプリカが展示されています。それほど貴重なものなのですが、これから五建の元の場所に復元される本物の「古井戸」を見て、この地域の過去におこったことを学ぶのは地域の小・中学生になるのではないのでしょうか。そうした思いから、「小・中学生にもわかる説明版」を用意することも含めて、小・中学生主体のセレモニーを企画できたらと考えているところです。ご協力いただければ幸いです。

☞ P.75 セレモニーのお知らせ

これからも地域の皆様とともに活動してまいりますので、よろしくお願いいたします。

江戸東京博物館の 「古井戸」レプリカ（右）と説明版（下） （JR 総武線・都営大江戸線 両国駅前）



平成 30 年度の活動結果について

宇賀 俊夫

NPO ア！安全・快適街づくり

平成 30 年度には次のような活動を実施して参りました。

(1) 「しんすい！まなぶ号」と「緊急時ボート使用に関する協定書」締結

6 月 10 日（日）に新小岩北地区連合町会が中川七曲りでエンジン付きゴムボートを使って水防訓練をおこなうのにあたって、当 NPO も「しんすい！まなぶ号」と命名したボートを購入して参加しました。訓練ではボートの操船、救援・救助、搬送活動が行われました。☞ P.17 連合町会合同ボート訓練

初めてのことで「しんすい！まなぶ号」はトラブルが多く、搬送中に空いた穴の補修で出遅れたり、予備燃料タンクを積み込んでいなかったため、川の真中でガス欠を起こし、救助艇に岸まで曳航してもらうなど散々なデビューでした。半面、最初からトラブルを経験したことは、今後の取り扱いに役立つ貴重な経験を得ることができたともいえましょう。このボートは今後も機会を見て訓練に参加すると共に、水害発生時には連合町会で活用していただくことで、連合町会長との間に協定書を締結しています。☞ P.100-102 ボートの取り扱いと「協定書」

☞ 24 号 P.107 「しんすい！まなぶ号」デビュー報告

(2) 輪中会議 ☞ P.25～ 「輪中会議」

30 年度も「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」の活動として 31 年 4 月 7 日に第 12 回目の輪中会議を開催しました。今回のテーマも昨年に引き続き「親水・浸水×まちづくり×ひとづくり」で、浸水・親水も広く考え、水害リスクと賢く共生する親水都市のイメージを共有し、浸水対応型市街地形成また浸水対応型建物などに思いをはせ、更には平時の暮らしの継続計画（LCCP）も必要だということも考えるものです。

当日は 60 名を超える方が参加し、第 1 部で過去 1 年間の活動報告を各参加団体が行いましたが、今年は新たな参加団体として東新小岩 7 丁目で結成された女性消防隊の皆さんが元気に今後の活動に対する意気込みを語ったり、上平井産業連合会の所属企業の方からは緊急時にペットボトルに装着してお風呂の水などを浄化するフィルターの紹介があったり、災害対策に強い関心を持って勉強を続けている「たまり場カフェ」の方も参加して、区から報告のあった江東 5 区広域避難推進協議会作成のハザードマップの説明や新小岩公園高台化の計画見直しに関する報告、更には東新小岩七丁目をモデルに作成された『我が家の備え マイタイムライン（私の事前防災行動計画）』の紹介等に対して活発な質問が出るなど、報告の話題にも広がりを見せてきたことは大きな収穫だったと言えます。

第2部第1のテーマ『「古井戸」の復元と活用』については地盤沈下の原因と現状についての報告に続いて、協議会主催で復元セレモニーの実施を考えていること、セレモニーには上平井中吹奏楽団による演奏に続いて第五建設事務所の大広間を借りて中学生に「古井戸の説明板」の記載文を考えてもらうワークショップを開催することを考えている旨の報告があり、今後実施計画について詰めていくことになりました。

最後に加藤先生から「浸水に対応した街づくり検討会」の検討状況について現況説明が行われると共に、6月には区議会に報告することになるだろうとの話がありました。

輪中会議は今後も NPO の重要な活動として毎年開催して参ります。

(3) ワークシート学習・出前授業・部活支援 ☞ P.57-70 学校から P.103-105 助成事業報告

葛飾区の地域活動団体事業費助成制度を利用した活動では、引き続き「親から子に語り継ぐ大災害時の避難について」をテーマとしたワークシートによる学習を上平井・二上・松上の三小学校で実施すると共に、若手大学関係者と地元講師による出前授業を上小松小学校を加えた四小学校の児童やうらら保育園の職員・保護者を対象に実施しました。出前授業の講師については大学関係者に異動があったため、新年度からは新たに外部の講師を加えて対応して参ります。一方中学校を対象の支援活動については上平井中での地域防災ボランティア部の活動支援を引き続き行ないました。

(4) 「古井戸」の復元 ☞ P.75 セレモニーのお知らせ

「古井戸」復元セレモニーについては輪中会議の項でも触れましたが、2019年秋に都の第五建設事務所の建て替え工事が完成し、仮事務所から復帰するのに伴い、地盤沈下の生き証人たる「古井戸」も元の場所に復元されることになりました。そこで葛飾区の指定文化財でもあるこの「古井戸」の復元を記念して、セレモニーを行い、併せて中学生にその説明文を作ってもらうためのワークショップを行なうことになりました。計画の詳細は今後詰めて参ります。

(5) ホームページの見直し作業 ☞ P.102 ホームページ見直し

定款の変更や NPO の活動内容の変化に伴い、既存のホームページの記事に現実の活動にそぐわない点も出てきたので、見直し作業を行なうことになりました。その結果、『NPO 法人について』の項を次のような呼びかけで始めることにいたしました。

NPO 法人「ア！安全・快適街づくり」のホームページへ、ようこそ！

私たちの NPO は、2002 年に設立され、東京東部の荒川と江戸川の水に囲まれた低地帯を浸水から守るとともに水に親しむことができる街となるよう、地域の皆様と活動している団体です。浸水と親水すなわち「しんすい」をキーワードに、この地域が「安全で、水と緑と安らぎのある東京一番の街」となることを目指して、新しい街づくりに関する手法の研究、提言、啓発、支援及び助言を行うことを目的として活動しています。

それ以下で、活動の概要を紹介した『ア！安全・快適街づくりの歩み』、対外的な活動としての『輪中会議とシンポジウム』についてお知らせし、次に小・中学校などへの『出前授業など活動支援』、続いて町会などを対象とした活動として『勉強会と講演会』、さらに経年的な記録として『活動の年次記録』、そして最後にその年の NPO の活動を総括した『ニュースレター』というタイトルをもって帯（ナビゲーションウィンドウ）を設けました。ご興味のあるところをクリックしていただければ幸いです。

そしてこのホームページをご覧になって是非会員になりたい又は一緒に活動したい、と思われた方は、どうぞご一報ください。ご連絡をお待ちしています。

なお、『NPO 法人については』の項では {NPO の活動の理念について} も詳しく紹介しておりますのでご覧ください。

(6) 大学との連携

東京大学の加藤孝明研究室が葛飾区からの依頼で検討している浸水対応型市街地形成の検討にはこれまでも側面から協力してきました。今後も引き続き協力してまいります。また、芝浦工業大学 中村仁教授とも地域学習活動で連携してまいります。

NPO は今後も「防災もまちづくり」をスローガンとして、引き続き地域の皆さんと共に活動して参ります。皆様方の変わらぬご支援をお願い申し上げます。

以上



西日本豪雨による倉敷市真備町の被災状況（南撮影）

理事から



富山市・富岩運河環水公園
（古い運河を改修して親水空間にしている 南撮影）



オランダ・アムステルダムの子供たちが遊んでいる
（ヨットで子供たちが遊んでいる 塩崎撮影）



高槻市 Web サイトより



農林水産省 Web サイトより

伝統的な“浸水対応型”建築（左：淀川の段蔵、右：木曽三川・輪中地域の水屋）

浸水リスクと賢く共生する親水都市を目指して ～動き出した「浸水対応型市街地」構想～

加藤 孝明

東京大学生産技術研究所 教授 / 社会科学研究所 特任教授

はじめに

GWの初日、東新小岩7丁目の方々と町会ボートに同乗させてもらい、荒川クルージングに連れて行ってもらいました。うなぎ釣りをする街の人に見送られながら出発。小さなボートからみる景色は、川面、スカイツリー、河川敷等々、思った以上に壮観かつ変化に富み、改めて川という空間の豊かさに感動しました。この豊かな空間をこれまでさほど使っていないことの勿体なさを感じつつ、一方で、つつい独り占めしたいとも思っていました。現代の東京人が忘れてしまった「親水性」、これを暮らし、地域の文化にどうつなげるか、改めて考えさせられました。

一方、昨年、西日本豪雨では、瀬戸内海地域を中心に大きな被害が発生しました。倉敷市真備町では、町域の大半が浸水する大規模水害と言ってもよい大きな被害となりました。今回の災害は記録的な降雨もさることながら、比較的、降水量が少ない瀬戸内地方に被害が集中したことが特徴でした。地域社会、インフラ、つまり、ソフトもハードも降雨や浸水へ対応していくことの重要性を改めて感じました。

東京では、昨年（2018年）8月、大規模水害時の避難対策を検討する江東5区広域避難推進協議会（足立、葛飾、江戸川、墨田、江東）の検討結果を受け、「水害で二週間以上」、「250万人域外避難計画」、「高層階でも生活困難」というセンセーショナルな見出しで、超大規模水害が発生した時の避難計画の課題が報道されました。要するに、逃げるのも困難、残るのも困難、ではどうするのか、答えが見いだせないことを指摘していました。すでに私たちの地域では、答えをみつけることが難しいことを承知した上で、これまで答えを模索しながら取り組んできました。社会重要課題としてクローズアップされた今、これまでの取り組みを拡充し、社会に対して模範（モデル）を示していきましょう。

ただし、楽しみながら。



浸水対応市街地の必要性

水害対策の常とう手段は、1に洪水を防ぐ「治水対策（守る）」、2に浸水に備えて「避難対策（逃げる）」です。安全工学の分野に「フェールセーフ」という言葉があります。これは、準備していた対策がうまくいかなくても破綻せず、それをバックアップする対策が準備されている状態をいいます。洪水が起こらないように治水対策があったとしても、川の容量を超える降雨があれば、浸水してしまいます。それに備えて避難対策が準備されているというわけです。いわば、治水対策のフェールセーフとして避難対策があると理解できます。

東京の広域ゼロメートル市街地（海拔ゼロメートル地帯に広がる広域市街地）では、新聞報道にもあったとおり、人数が多いがゆえ、域外避難が困難です。また垂直避難（建物の上階への避難）も浸水継続時間が長いため、困難です。つまり、広域避難対策も失敗する可能性があるわけです。東京の広域ゼロメートル市街地では、「守る」「逃げる」の常とう手段だけでは不十分であり、それに加えてもう一枚、フェールセーフを厚くする必要があります。それが「浸水対応市街地」です。「逃げる」「守る」「受け流す」の三位一体の対策が必要とされます。

「浸水対応市街地」とは、簡単に言えば「浸水しても大丈夫な市街地」のことを指します。浸水に対応できる地域社会づくり（ソフト）、そして浸水に対応できる市街地づくり（ハード）をすすめ、気候変動が激化したとしても安心して暮らせる地域をつくっていくことが必要です。

国土交通省では、2015年から「水防災意識社会の再構築」を掲げています。かつて、水災害に対する備えは、社会全体で取り組まれてきました。水防活動、あるいは、地域に根差した知恵を使って、行政ではなく、むしろ地域社会が担ってきました。今一度、この事実を思い起こし、かつてのような「水防災意識社会」を再び、創り上げる必要があります。もはや治水対策だけでは、顕在化しつつある気候変動に対して時間的にもコスト的にも対応に限界があることが背景です。

この地域でのこれまでの議論、活動の蓄積の上に、「浸水対応型市街地構想」があります。全国の先陣をきって展開していくことが期待されていると言えます。「葛飾から世界へ」。2010年6月のNPO主催シンポジウムでの宣言の一つです。気候変動への適応策として世界にも発信していくことができるものと確信しています。

浸水に対応できる地域社会づくり

新小岩北地区では、2006 年秋ごろからワークショップ等による議論が始まりました。現在は、「輪中会議」を通して多様な主体の緩やかな連携を通して着実に前進しているように見受けられます。NPO や町会の人々による小学校の出前講座、恒例となったボート訓練、FM 葛飾への出演、地盤沈下の生き証人である井戸のパイプの保存等、精力的に活動が行われています。町会の人々がテレビや啓発ビデオに出演する等、全国でも有名になっています。「先生、葛飾区のあの活動、有名ですね。知ってますか？」と地方の方に聞かれること多くなりました。先駆的な取り組みと評価されるようになっていきます。

しかし、やれること、やるべきことは、まだまだありそうです。

自然な形で、楽しみながらやれる方法、場づくりを引き続き、模索していくことが重要だと思います。今、そしてこれからの取り組みが地域の常識になり、そして「文化」になる。引き続き、取り組んでいきましょう。

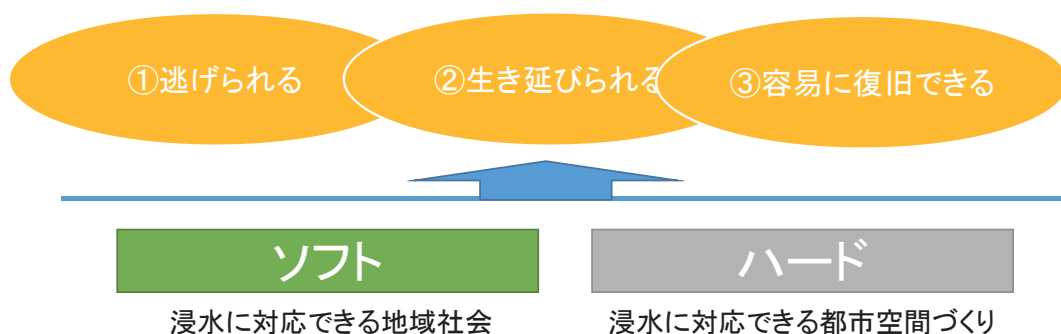
三位一体の対策(対策の重層化)

これからの対策



浸水しても大丈夫な市街地

浸水対応型市街地構想(葛飾区+東大生研)(2019)



「守る」「逃げる」「受け流す」の三位一体の対策

浸水に対応できる都市空間づくり

2018年1月の朝日新聞紙上で町会長の中川榮久さん（80）のコメント、「都心に近く、リスクはリスクとしてきちんと取り組めば東京で一番いい街になる。100年後、200年後のことを考えたい」。浸水に対応できる都市空間づくりとは、まさにこのことです。100年はちょっと言い過ぎかもしれませんが、今から順次進め、20年、30年、40年先の実現を目指し、「域内で命を守れる」、「取り残されても生き延びられる」、「浸水しても被害が小さく容易に復旧できる」、そして「安心して住める」地域を段階的に時間をかけて創り上げていく構想です。具体的には、域内で高台やデッキ等、浸水しない空間を増やす、市街地の中に浸水しても必要なライフライン（水、電気、熱源）を自立的に供給できるしくみを計画的に確保する、最終的にそうした空間をネットワーク化する、さらに低層の建物については被害を小さくするライフスタイル、建て方、復旧しやすい工法の普及定着を図ることで浸水しても大丈夫な都市空間を創っていく。

公園や堤防沿いの高台化、学校や公共施設の浸水対応改修等、やれることはたくさんありそうです。また、高架道路の活用、駅のデッキの活用等、いろいろなアイデアがありえます。再開発事業の中に組み入れることも可能だと思います。今後、国、東京都等とも一緒に検討し、アイデアの具体化、実現方策の検討を進めていけると良いと思っています。

2019年2月、東京都都市計画審議会から「東京における土地利用に関する基本方針」が発表されました。これは、今後の東京の都市づくりの指針となる最上位の文書です。この中に下記の文章が入りました。

「東京東部の海水面よりも低い地域に形成された広大な市街地、いわゆる広域ゼロメートル市街地では、気候変動によって高まる大規模水害リスクに備えて、浸水発生時に住民の生命の安全を確保し、財産・経済への被害を最小限にとどめ、速やかな復旧・復興を可能とするために、地域の実情に応じた効果的な対策を講じ、浸水に対応したまちづくりを進めていく必要がある」

「国などにおける検討などをふまえ、広域ゼロメートル市街地における都市開発諸制度などの浸水対策について検討」

「低地部において、かさ上げた公園や住居の整備を行うなど、市街地整備の面からも浸水対策を促進」

これは画期的なことです。従来、都市計画が対象としてこなかったといえる「大規模浸水」対策に対して、踏み込むことの宣言です。明らかに社会の雰囲気は変わりつつあります。浸水対応化に向けて力強く踏み出していける、踏み出していくべき時だと思います。

浸水対応市街地構想を前に進めるエンジン

「防災【も】まちづくり」。防災だけではなく、総合的に豊かな街を創り出す過程で防災課題も解消していくことが理想です。マイナスをゼロに近づけることだけでは、力強く歩めません。プラスを創り出すことを通して、マイナスも結果的にゼロにしていくことが重要な視点です。地域の魅力を高めていくことが必須だと思います。

「浸水と親水」。2007年頃に活動の中ででてきたキーワードです。豊かな河川空間、水辺空間という資源を活かし、親水性というすばらしい資源を活かし、これを推進力と明確に位置づけ、浸水にも対応できる市街地を進めていくことが重要です。そのための仕掛け、しくみを考えていきましょう。



上空から七曲がり：葛飾区都市計画マスタープラン（表紙）

浸水対応型市街地の実現に向けて～親水文化を育てる～

土肥 英生

(認定 NPO) 日本都市計画家協会 理事

江戸時代(1603～1867 年)の江戸の水害件数は記録がたどれるもので 181 件、山水(荒川上流、利根川上流からの出水による洪水)、地水(江戸への降雨による洪水)による水害が相互に組み合わって、年 1 回近く、洪水被害にあっていました。また、江戸の下町には、縦横に水路が巡り、舟運などに活用され、親水都市でもありました。

荒川放水路の整備などの治水対策の進展もあり、1947 年(昭和 22 年)のカスリーン台風以降、大きな水害を葛飾区民は経験していません。また、大正期から昭和 30 年代に進行した工場用水汲み上げによる地盤沈下により、市街地全体が堤防に囲まれた低地となって、都市空間自体の非親水化が進行しました。葛飾区民の実感としては、水害はおろか、河川に囲まれた市街地に住んでいるという実感の無い方が大多数ではないでしょうか。

こうした現実の中で、地球温暖化に伴う水害リスク増大に備える、浸水対応型市街地を実現してくために、「親水文化の醸成と展開」を提案したいと思います。

○ 親水文化を育てるシンボルイベントの実施と河川空間の演出や活用策の検討と実証

葛飾区は荒川、江戸川、中川などの河川に囲まれており、「水塚」という水害への備えが残っており、水とともに生きる文化のあった地域でもあります。こうした歴史的背景も踏まえ、浸水対応型市街地構想では、時間をかけて河川空間と都市空間を一体的に捉え、親水意識を育む市街地の形成を図ることとしています。

荒川や中川を舞台とした親水交流イベントなどを継続・実施し、この地域に再び、水と共に生きる文化を育てていくため、区民、区内企業、NPO、河川管理者、行政が協力して、親水文化を育てるシンボルイベントを行う。同時に、シンボルイベントを通じて、例えば、セーヌ川沿いの夏季ビーチのような、季節に応じた、河川空間の演出や活用を検討、実証する。こうした取組みは、新しい都市空間づくりへの夢あるチャレンジともなるでしょう。

【親水文化を育てるイベントイメージ例】



外堀公園での音楽イベントの様子(出典:ミズベリング HP)

☞ P.70 ミズベリングイベント「水辺フェスタ」に参加しました!



セーヌ川に夏季開設されるビーチの様子

倉敷市真備町の洪水被害を視察して

中村 仁

芝浦工業大学 教授

岡山県倉敷市真備町は、2018年7月7日未明、豪雨により複数の河川堤防が決壊し、大規模な浸水被害を受けました。浸水域は1,200ha、浸水した建物棟数は約4,200棟となっています。最大浸水深は5.38mで、浸水した建物の約65%が3m超（2階床高以上）の浸水深となっています（研究室の調査）。死者は51人となり、51人のうち住宅の1階部分で遺体となって発見された人数は42人、さらに、42人のうち65歳以上の高齢者が36人となっています（朝日新聞の調査）。2階に避難しても安全とはいえない状況でしたが、そもそも2階にすら避難が困難な災害時要支援者に犠牲者が多いことが推察されます。

洪水発生から1週間後の2018年7月14日、土木研究所の水災害・リスクマネジメント国際センターのメンバーと一緒に真備町の被害状況を視察しました。その際に撮影した写真を以下に掲載します。真備町と東京の東部低地帯とでは状況が大きく異なりますが、市街地が非常に深く浸水した水害であったという点では、大きな示唆を与えるものと考えます。



決壊点近くの倒壊建物



2階部分も浸水した建物
(外壁の痕跡で浸水深がわかる)



浸水した住宅の一階部分



浸水した保健福祉会館の一階部分

新小岩北地区連合町会長として

青柳 勇

東新小岩五丁目町会 会長

平成 30 年 6 月 10 日、中川・立石緑地公園にて連合町会の合同救命ボート訓練を実施した。天候が小雨模様であったが、災害はいつ来るかわからないという事で実施した。

実施するに当たり、消防署や関係機関に書類申請を提出しなければならない。すこし面倒である。

新小岩北地区連合町会という組織は、東新小岩地区（一つの UR 自治会と上小松、東 5、東 7、東 8 の 4 つの町会）西新小岩地区（一つの都営自治会と西 3、西 4、西 5 の 3 つの町会）の計 9 つの自治町会が新小岩北地区連合町会である。

この地域は土地が低く、河川が多く（荒川、中川、江戸川、綾瀬川）水辺が多く、水害が発生すると 2m～2.5m 位の水位になると輪中会議で勉強した。東 7 丁目の中川会長さんのところでは、早くからエンジン付きのゴムボートを購入し、水害に備えた。

以上のようなことで、他の町会でもエンジン付きゴムボートを備える必要があるという事で、新小岩北地区連合町会 各町会がボートを購入した。

そこで、6 月 10 日の訓練日を決めて実施することになった。

約 200 人以上の人が集まり、物資の輸送や、人の搬送等の操船訓練を行った。これは、いざという時に、大変有意義な訓練である。他の町会役員の人たちとのコミュニケーション、協働、協力、顔の見える形での訓練は、これからも続けなければならないと思う。

そして、水に親しむ、親水の街にしたい。



平成 30 年度 連合町会合同救命ボート訓練
(2018 年 6 月 10 日 立石緑地公園にて)

☞ 24 号 P.107 NPO ボートも参加しました

輪中会議と木曽三川輪中

中川 榮久
東新小岩七丁目町会 会長

輪中会議、加藤孝明先生たちが我々に与えてくれたテーマです。先生は木曽三川の下流地域と新小岩ゼロメートル地帯を重ね、大洪水の発生が懸念されるこの地での安全・安心街づくり会議を「輪中会議」（主催：ゼロメートル市街地協議会〈新小岩北地区連合町会、広域ゼロメートル市街地研究会、日本都市計画家協会、葛飾区、NPO ア！安全・快適街づくり〉）と命名し未来は安全安心で素晴らしい地域になるようにとご提案頂いたと思う。

木曽三川の輪中を調べてみた。

木曽三川（木曽川・揖斐川・長良川）の三川が河口で合流して伊勢湾に流入していたため、各河川の上流地域での降雨の関係等で常に何れかの河川が氾濫して下流の村々が大洪水に見舞われ、自衛手段として村の周囲に堤防を築いた（輪中）。各村々が堤防を築いた為、川は天井川となり、洪水の危険が増大してしまった。江戸時代 8 代将軍吉宗の命により木曽三川の改修を井沢弥惣兵衛爲永が計画し、薩摩藩に治水工事を担当させ三川にそれぞれ堤防を築き分流させた。しかし工事は長期化・難航を極め薩摩藩士 51 名が責任を取って自害した。また工事完了後に総指揮の家老・平田^{ゆきえ}鞆負も国元に報告後自害した（宝暦の治水事件）。

中川七曲りの改修工事を調べてみると、意外にも木曽三川の改修との共通点が見つかった。

中川・綾瀬川の改修工事も 8 代将軍吉宗・9 代家重の代に井沢弥惣兵衛爲永に計画させ、関東郡代伊奈備前守忠次に命じ工事を熊本藩・薩摩藩に命じた。また輪中会議の拠点中川七曲り左岸の改修工事は、薩摩藩が村民を動員して完成したようだ。東新小岩七丁目^{じょうぼんじ}に上品寺と言う古刹があり境内に閻魔大王座像（区内最大丈 2 メートル 8 センチ）が安置されている。近年の研究で閻魔大王像と中川七曲り左岸改修との関わりが推測されている。改修工事を命じられた薩摩藩は先の木曽三川改修の莫大なる損失・損命を考慮し、京都より工事の安全・疫病排除・村民の信頼等を得る為当地に安置された様だ（古老の言・閻魔様は中川の大洪水の時に上流より流されて上品寺に流れ着いた）。また薩摩藩が工事をした証しとして、西新小岩 5 丁目（中川左岸近く）に関口家があり（屋号を薩摩の^{うち}家）、関口家の話では昔薩摩の侍が長逗留（現場指揮者）していたとのこと。ま

た現場に従事した村民は苗字の無い時代で名前呼び合っていたが、薩摩藩の影響で名前の後に【ドン】を付けていた。例えば当主が孫右衛門は【マゴエムドン】現まどか幼稚園、金兵衛は【キンペドン】現モンチッチの(株)せきぐち等、百数十軒が確認されている。

加藤先生たちがこの地で与えてくれた輪中会議は図らずも木曾三川輪中と多くの共通点があり、偶然にしても何か因縁を感じざるを得ない。輪中会議を通して河川改修の歴史に習い、知恵を絞り、意見交換を重ね安全安心な街づくりを目指したいと思う。



上品寺・薩摩の家の位置



上品寺に安置されている閻魔大王座像

「災害とレジリエンス」も「てんでんこ」も

渡邊 喜代美

NPO ア！安全・快適街づくり

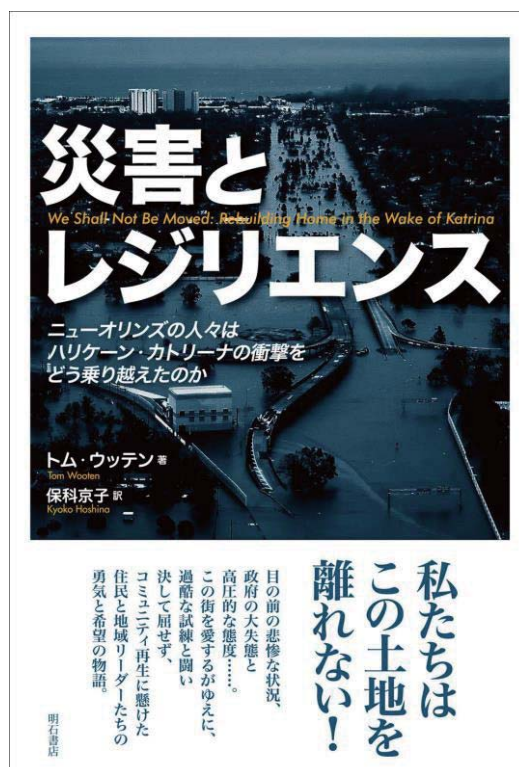
地元が一番の教師 NPO ア！に参加したのは初期。かなりの年月が経つ。新小岩の駅も新装になって、見慣れた昔の駅が懐かしい。まちづくりなど勉強してきたつもりであったが、ゼロメートル市街地の課題を知るにつけ、わからないことだらけであった。街を歩き、街の人々の話を聞き、川の縁や橋を歩き、船に乗ってみたり、大学の講座や、都市計画家協会の勉強会に参加してみたりもしたが、結局、多くは、地元の人々が、一番の教師となった。

必要なものは何か また、2011 年 3 月 11 日東日本大震災のその年の 7 月、なにができるかとの思いで現地に入って多様な方々に出会った。地元の過酷な状況下で、自分にできることは何かを微力ながら考えた。考え考え地元を歩いて行き着いたのは、孤立化しそうな人々の交流の場づくりであった。仮設の集会所などを巡って、今必要なものは何か聞くことから始まった。必要な“物”もあるが、それは支援物資の中にはない文化的活動や情報提供に必要なもの、楽器やパソコン、あるいはミシン、糸、布などあるいはみなで囲めるテーブルやいすなどもあった。針一本残らなかったとあっさり表現しいろいろ話をしてくれた女性は協力しあう仲間となったりした。地元の人々の話を聞いていくうちに、私たちでもできることは、人と人の出会いの場、出会いに必要な事々、ものを地元の人たちと考えると、外部に発信し、外部の力も活して地元を手助けすることであった。2011 年から総計 5 年余、毎月 1 回は通い続けられた。

結構にぎやかである また、加藤研や葛飾関連で「子ども会議」なども開いたり、東京でのシンポに登場いただいたり、NPO ア！で被災地バスツアーを企画して地元と交流したり、結構にぎやかであった。地元の人たちからは割合好感を持って受け入れてもらえたようだ。最近元気になった地元も見においでと言われながら、今は東京を離れにくい事情もあって、電話で話したり、情報交流したり、資料を送ったり、送られたり、いろいろである。また東京に来る機会があれば声をかけてくださる友人もできた。

こんな体験が重なる中で、再生するとはどうか、レジリエンスとはなんだ。かなり深い問題だ。どうも行政もコンサルも、どこまで読み込んで住民と話合っているのか、計画を提案しているのだろうか疑問することも多くなった。そんな時、出あった本や取材記事を紹介したいと思ったのが、このたびの素人記事である。

「災害とレジリエンス」 水面より下に街があるという類似点と、地域社会が人のかわかりを大事にしたコミュニティという類似点などを考えて出会った本「災害とレジリエンス」は、この本の邦訳題名でもある。著者はトム・ウッテン。2008年ハーバード大学卒の研究者。2005年8月のハリケーン・カトリーナから1年半過ぎた2007年2月ボランティアとしてミシシッピ州のガルフボードで住宅の瓦礫片づけからはじまったというトムの膨大な記録からこの本にある物語がある。ハリケーン・カトリーナの衝撃をアメリカ南部ニューオリンズの人々はどう乗り越えたか。人々とのかかわり、暮らし、文化、歴史、コミュニティの活動など克明な記録が下敷きになって、コミュニティ再生にかけた住民と地域リーダーの物語であった。「レジリエンス」を考えるに絶好の書であった。



『災害とレジリエンス』（明石書店）

「復興」とは、「いかに困難な深い問題か」 『復興』という言葉には、とてつもなく多くの意味が含まれる」「災害における復興とは被災した場所に存在する命のあらゆる側面を復活させることに他ならない」

原題は『We Shall Not Be Moved』 ニューオリンズ復興の物語であると同時に、地域社会の活性化、再生物語でもあるといえる。

もう一つの出会いは「てんでんこ」 さて「てんでんこ」とは聞きなれた言葉だと思う。ここでの紹介は朝日新聞のコラム「てんでんこ」。各取材記者が、災害にあった地域であった出来事や人、暮らしなど取材したリアルな記事で、とても読みごたえがある。この記事からは現場の情景、当事者主体がよく見える。キーワードは多岐にわたる。約束、電気のあした、祭人、計画運休、伝える、遺言、大阪北部地震、ブラックアウト、商店街、漁運あれ、など。

例えば、キーワード「ブラックアウト」。取材先は北海道、病院・市民・警察・札幌市・ホテル・JR運休・JR復旧・物流・コンビニ・厚真町・酪農・海保・旭山動物園などに至る。

例えば、キーワード「商店街」では、東日本大震災後、私の最初の訪問先であっ

た南三陸町の“ぼうさい朝市”も取材されていた。そこで知り合った商店街の方々との出会いは、やや強烈であった。130年の老舗のかまぼこやさんは、何にもかも無くなった！残ったのは瓦礫の中から誰かが見つけ出して届けてくれた先祖の位牌一個。漆塗りの立派な位牌を見せてくださった。そんな状況にもめげず「商人なのに売るべきものはなにもない」「どうする」そこにかまぼこの型枠を送ってくれた仲間がいた。市を開こうという仲間がいた。なんと被災から半年ほど「ぼうさい朝市」を開きハチマキ姿でリーダーを担った、という具合である。被災してなにもかもなくしたが、家族は無事だ。これこそが幸いと、明らかに未来へ向かった姿勢に圧倒された。

例えば、キーワード「漁運あれ」 取材された若い漁師の人間性あふれる記事は、胸が熱くなる。生きるための自律、またそこから社会に向けた厳しいメッセージが胸を打つ。原子力発電所と海、漁師からの視線は厳しい。

ここでは、ほんの一例しか書けないが、「災害とレジリエンス」と合わせ「てんでんこ」の記事に“も”触発された。ぜひ一読されたい。

やや乱暴な整理であるが「レジリエンス」も「てんでんこ」も、しっかり赤い糸でつながっている。復興が“いかに困難な深い問題か”は、人と人の豊かな関係性の中で読み解かれていく。未だに解のないもの解けない問題はとも多い。でも絶え間なく、人々は、たたかって生み出し、育てていく。コミュニティということが、ごく多少わかり始めてきた。

さて、私たちの街の「防災もまちづくり」はどうであろうか。こちらも赤い糸で結ばれている。というのが私論である。建造物や土木工事をすればよいのではない。人、暮らし、歴史、文化、コミュニティ、その地域が、人々が育て上げてきた、実は表だって見えないが貴重な街のベース、これこそが重要だ。この深い問題を共有できる場として、自慢すべきは「輪中会議」の継続であろうか。互いに顔の見える関係性の中で、経験や情報の共有をすることで、自律発展的に地元の課題に取り組んでいくことができる。いたって健康的な未来志向可能な場であろう。

「てんでんこ」、「災害とレジリエンス」に登場する人々と、輪中会議に参加して、果敢に意見を交わす人々は、私の中では重なっている。コミュニケーション力は高く、閉じずに先に開いていることが気持ち良い。

「防災」「まちづくり」を“も”でつないで、先が開かれている。具体性にとんだ「防災」と非常に難易度高いしかし人々の暮らしを支える基盤としてある「まちづくり」を「防災“も”まちづくり」した先見性は高い。知性的である。“も”

の議論は深め、進展させたい。提案されたことを、かたちだけにしておいてはいけない。

さてここで側面から具体的な事例を考えたい。浸水対応型市街地づくりも考えてみたい。例えば、用途指定で浸水対応市街地指定をしてみよう。いわば堤防のスーパー堤防化は100年単位の話になるが、エリア指定がされている。なぜか、川から考える、川の管理者のできる範囲としての施策という発想もあるが、どのように発展的に展開するか課題は別でもある。

そこで耐水対応型市街地づくりを市街地側から考えてみると人々の暮らしぶりも見えてくる。建築でみれば、公共建築への耐水対応型建築の義務化とか、民間の耐震性能の高い建物は耐水対応型建築の義務化とか、一般住宅では耐水対応型住宅とか、いろいろある。もちろん改修改善で対処する方法も広く考えたい。こうした発想は、方向性が決まれば意外と市場は動くものである。各単体の手当てに何らかのインセンティブを用意することなども要研究である。いわば、方向性が決まれば、「まちづくり」へのかかわり方も変わってくる。世界にはかなり事例もある。

この大きな方向性は、“災害リスクと賢く共生する親水都市”。住民の議論もさることながら、国や自治体が議論しなければならない。対応策は大学や建築、都市計画を賄う専門家や大学研究室、民間研究室などの人々も研究を担ってほしい。

難易度高い側面はコミュニティである。こちらは、ハード系、ソフト系などと単純に縦割りできないことであろう。やや飛躍するが、根底にはレジリエンスやてんでんこ、の思想、哲学が欠かせない。地元とともに分野を超えた議論は希求される。

ややメモ的いい分であるが、私の幼い試論というべきか試考というべきか割合真面目に議論の足しにしていただければ幸いである。

ちょっと追記。避難情報がわかりにくい。“避難情報 わかりやすく”という新聞記事。“運用される警戒レベル”一覧を、ジーとみても読んでも分かりにくい。それでは自分に当てはめてみようとするがそれでもわかりにくい。なぜなのだろう。運用が示され、示されるたびにますます混乱にはまる。卓上でつくる典型かもしれない。マンガで説明するとわかりやすいだろうと思ってか紙面一杯の説明マンガで表現するが、ますます混乱する。そして新聞の最後の一行コメントが逃げの一手。「住民は状況に応じて適切な避難行動をとる必要がある」とくくって、住民に投げる。やれやれ疲れる。

適切な避難行動には正確な情報、経験の共有がほしい。住民は自分の命がかかっているのであるから、当然一番いい方法を必死で考えるだろう。しかしそれは、災害時即時に、正確な情報、適切な情報が公開されてこそ、行動可能なのである。最悪の事例の一つに福島原発事故の速報が正しく伝えられず、危険ルートが示されず、避難が混乱し、多くの弱者が高齢者が、繰り返す避難先変更の過程で亡くなられたケースである。

正確な情報、適切な情報とはなんだ。例えば、堤防の決壊しやすい位置とか、崩れやすい崖とか、地図情報を分かりやすくしたら、準備が早まるかもしれない。情報提供はごまかさず、まごまごしないことだ。風評にならないよう、住民に正確に伝えることが公の重要なミッションだろう。

メディアの役割は重要だ。例えば、テレビの画面に激しい流れが映し出される、しかし地域全体はどうなっているのか、どこに避難したら危ないのか、画面から一向に読み取れない。自分はどうしたらよいのか頭を抱えてしまう。メディアも画面でどう伝えるか要研究であろう。

追記が長くなりました。前段も合わせ、ちょっとしたメモのつもりでお読みいただき、意見を交わせれば幸いです。

5段階の警戒レベルと防災気象情報				
警戒レベル	住民が取るべき行動	市町村の対応	気象庁等の情報	相当する警戒レベル
5	災害がすでに発生しており、命を守るための最善の行動をとる	災害発生情報 ※の報に即座に発令 ・大規模避難指示発表時は、避難勧告等の対象範囲を再度確認	大雨特別警戒情報 危険度分布 氾濫発生情報	5相当
4	速やかに避難 ・危険な区域の外の安全な場所へ速やかに避難	避難指示(緊急) 避難勧告 第4次防災体制 (災害対策本部設置)	大雨警戒情報 高潮特別警戒情報 土砂災害警戒情報 極めて危険 非常に危険 氾濫危険情報	4相当
3	避難準備が整い次第、避難開始 高齢者等は速やかに避難	避難準備・高齢者等避難開始 第3次防災体制 (避難勧告の発令を判断できる体制)	大雨警戒情報 洪水警戒情報 警戒(警戒級) 氾濫警戒情報	3相当
2	ハザードマップ等で避難行動を確認	第2次防災体制 (避難準備・高齢者等避難開始の発令を判断できる体制) 第1次防災体制 (連絡要員を配置)	大雨警戒情報 洪水警戒情報 注意(注意級) 氾濫注意情報	2相当
1	災害への心構えを高める	心構えを一段高める 職員連絡体制を確認	大雨警戒情報 洪水警戒情報 注意(注意級) 氾濫注意情報	1相当

※1 夜間～翌日早朝に大雨警戒(土砂災害)に切り替える可能性が高い注意報は、避難準備・高齢者等避難開始(警戒レベル3)に相当します。
※2 早急警戒が発令されている際の高潮警戒に切り替える可能性が高い注意報は、避難勧告(警戒レベル4)に相当します。

気象庁「防災気象情報と警戒レベルとの対応について」より
(<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/bosai/alertlevel.html>)

★「てんでんこ」の記事は朝日新聞デジタルで・・・

<https://www.asahi.com/topics/word/てんでんこ.html>



第12回輪中会議 プログラム

第12回 輪中会議 2019

■日時：2019年（平成31年）4月7日（日）

14～17時 輪中会議 （無料）

17～18時 交流会 （500円）

■場所：新小岩北地区センター（葛飾区東新小岩6丁目21-1）

■主催：葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会

※構成メンバー：新小岩北地区連合町会、NPOア！安全・快適街づくり、葛飾区、
広域ゼロメートル市街地研究会、認定NPO日本都市計画家協会

■今回のテーマ：親水・浸水×まちづくり×ひとづくり

浸水・親水も広く考え“水害リスクと賢く共生する親水都市”のイメージを共有する。
浸水対応型市街地形成また浸水対応型建築など、平時の暮らしも継続計画（LCCP）が必要だということも考えます。

一方、地元などそれぞれ自主的な取り組みの報告を受けて、広域ゼロメートル市街地における持続可能なまちづくり、ひとづくりなど、経験・情報の共有を図り、意見を交わし、また連携します。

「親水・浸水×まちづくり×ひとづくり」地域人による新たな展開を期待します。

プログラム

■第1部：多様な活動報告（司会進行：塩崎）

地域から

@ エンジン付きゴムボートの活躍状況

@ 女性消防隊発足

● 小・中学校から

@ 上平井中学校 2018年度活動報告（地域防災ボランティア部）

@ 出前授業の報告と次の展開

@ 上小松小学校での展開「学校地域応援団」との連携

● 行政から

@ 浸水に対応した街づくり検討会の報告

@ 葛飾区から

- 5区協議会

- 新小岩公園について

- 区水陸両用車「ARGO」（「すい防」、「ちー防」）購入

@ 荒川下流河川事務所 近況報告

- 高規格堤防について

企業等

@ 町会との連携

- 輪中会議に初めて参加する人たち
- NPO から

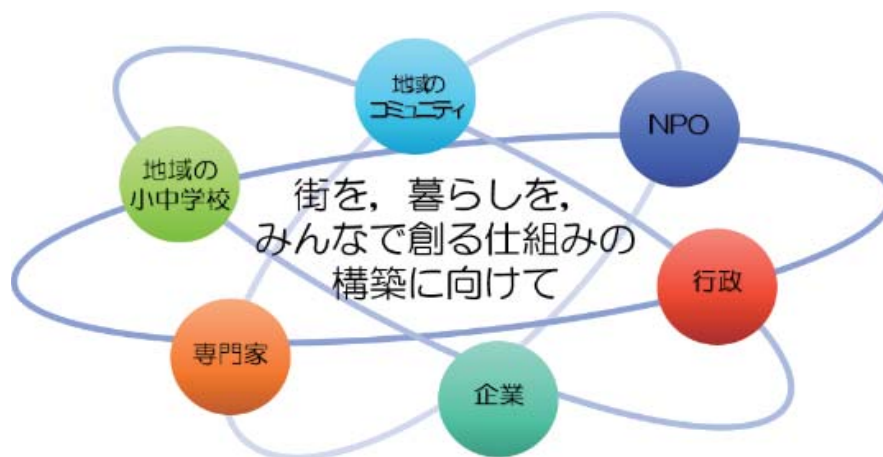
@ ニュースレター総集編企画

■第2部：親水・浸水×まちづくり×ひとづくり （司会進行：ヤスミン）

- 「古井戸」の復元と活用
 - @ 地盤沈下の原因と現状
 - @ 復元セレモニー等の提案
- 浸水対応型市街地のこれから
- 意見交換

【これまでの経緯】 詳細は「これまでの取り組みと系譜」をご覧ください

17年余にわたって町会、NPO、専門家、大学、行政などが中心となって、大規模水害に備えるための様々な活動、研究をすすめ、2012（平成24）年度「新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」を組織し、安全・快適まちづくり活動を広く地域に繋げ、交流、発展、創造の場として「輪中会議」を立ちあげました。経験を共有し、地域の未来を語らう。



【これまでに参加した人・組織】

- 新小岩北地区連合町会の各町会・自治会のみなさん
- 地域住民のみなさん（葛飾区、江戸川区、足立区など）
- 地域の社会福祉法人（保育園、幼稚園、老人福祉施設）
- 地域の民生児童委員
- 地域の消防団
- 地域の市民消火隊
- 地域の小中学校
- 地域のPTA
- 地域の小・中・高生
- 地域の企業
- 地域の消防署（本田消防署、同上平井出張所）
- NPO ア！安全・快適街づくり
- 行政（葛飾区、東京都、国土交通省、内閣府）
- 専門家（東京大学、芝浦工業大学、認定 NPO 日本都市計画家協会）
- 広域ゼロメートル市街地研究会
- 学生（広域ゼロメートル市街地や輪中会議など勉強したい学生たち）
- 葛飾区保健所と医師会



第 12 回輪中会議トピックス ～議事録から～

25 号編集会議・編

はじめに

輪中会議の事務局でもある NPO ア！安全・快適街づくりの編集会議では、記録を概要化して掲載しようと考えましたが、発言にはそれぞれ個性があつて、概要化するとつまらない記録になってしまいそうだと考えなおした。今回輪中会議はじまって以来の、全収録を試みました。この記録から共有してほしいのは、経験や情報の交流、人の出会いの豊かさを読み取ってほしい。輪中会議はおもしろい！と、おおいに、大事に育てよう、ということ共有してほしいと思い、編集会議で頑張ってみました。“お金の資本だけでなく、ソーシャルキャピタル、つまり人間のつながりという資本というのも重要。”(P.49) という加藤発言にもつながります。

12 回記録係は南、渡邊。聞き取りは大変な部分もあり、また膨大な字数ゆえに、ニュアンスが違うよ！というところもあるかもしれませんが、そこんところは心広くしてご容赦ください。

また、発言の位置を一部変えました。例えば加藤先生の 1 部での発言は、2 部でお話していただく予定の内容でもあり、今回の輪中会議の重要テーマでもありましたから、**浸水対応型市街地構想は 2 部**に入れました。

また、基本は発言者名は記号化しましたが、公共部門などは、明記で出しております。

第 12 回輪中会議の参加者の紹介

- 新小岩北地区連合町会の各町会・自治会のみなさん
- 地域住民のみなさん（葛飾区、江戸川区、足立区など）
- 地域の社会福祉法人（保育園、幼稚園、老人福祉施設）
- 地域の民生児童委員
- 地域の消防団・地域の市民消火隊・女性市民消火隊
- 地域の小中学校／小・中・高生
- 地域の PTA
- 地域の企業（上平井産業連合会、かつしか FM、大成化工など）
- NPO ア！安全・快適街づくり
- 認定 NPO 日本都市計画家協会
- 行政（葛飾区、江戸川区、国土交通省荒川下流河川事務所）
- 大学関係（東京大学、芝浦工業大学）

☆ 協議会メンバー代表 挨拶

◎協議会会長（NPO ア！安全・快適街づくり理事長 成戸寿彦）

今回は12回目の輪中会議。例年は3月に開催しているが、今年は会場の都合で4月になった。輪中会議に参加しているみなさんで情報を共有することが第一の目的。この一年での変化がたくさんあったと思う。たとえば新小岩公園の高台化はどうなっているのか、大成化工の高台化、地域や中学校の活動などの情報を発信していただいて、皆さん方で共有するという内容が第1部。

第2部では、テーマを設けて、今年は2つのテーマを設けた。

- ・「古井戸の復元」第五建設事務所に地盤沈下の生き証人としての古井戸があって、建て替えにより保管されていたものを、今年秋～冬までに復元される。それを歓迎するセレモニーを提案する。

- ・加藤孝明研究室と葛飾区で長年研究している浸水に対応した市街地整備の現状。

そのような皆さんからの情報発信と意見交換をしていく。みなさんの活発な意見交換をお待ちしている。

◎協議会の構成員（広域ゼロメートル市街地研究会 東京大学教授 加藤孝明）

活動をはじめて15年くらいたつ。だんだんはなしが出来上がり、盛り上がっている。さらに加速度的に前に進められたらと思うのでよろしくお願いします。

◎協議会の構成員（新小岩北地区連合町会長 青柳勇）

北地区連合町会として、NPOに地域の問題を教えていただき、勉強させていただいている。よろしくお願いします。

◎協議会の構成員（葛飾区 都市整備部長 情野正彦）

私も係長時代から十何年、NPOの調査のときからこの地域にかかわっている。

このあとも区から報告させてもらうが、浸水に対応したまちづくりの関係など、みなさんと一緒に少しずつでも進展させる形になるよう、区の方でも取り組んでいくので、よろしくお願いします。

◎協議会の構成員（日本都市計画家協会 理事 土肥英生）

私も12年くらいかかわっている。協会の事務局長は4/1をもって退任し、理事として参加している。協議会の活動が非常に広がっているということで、これからは一緒に活動していきたいと思う。

★第1部 多様な活動報告

■司会進行 塩崎（加藤研究室）

多様な活動報告ということで、前回の輪中会議から今日までの間にこんな活動をしてきたことをそれぞれ報告してもらいたい。

今日のテーマ、「親水×浸水×まちづくり×ひとづくり」ということで、これらをキーワードにしながらいろいろと意見交換していけたらと思う。

★地域から

◎ エンジン付きゴムボートの活躍状況

☞ P.109 の写真も参照

P.110 ボート訓練に初参加して

“危機にはその場で対応する”

(T) 東新小岩七丁目防火防災部は、3月、桜の植生調査（実は花見もかねて♪）にボート2台で行った。寒い時期で、桜も満開ではなかった。町会の所有ボートは、10年目と3年目。2艇とも劣化してきて、空気がどんどん漏れてきてしまうという状況になっているが、“危機にはその場で対応する”がうちのポリシーなので、ガムテープと接着剤を貼って出航！ところが、こんどはエンジントラブルで漂流しはじめてしまった。

あきらめて帰ろうと思ったら、ちょうど大成化工沿いに流れ着き、大成化工でエンジンを貸してくださって、荒川下流河川事務所のロックゲートを通していただいて、スカイツリーまで、調査に行ってきた。

メンテナンスには苦労している。故障続き。いまの状況だと「ゴムボートの活躍状況」というには程遠い状況。

2019年5月の10連休、今回のリベンジを兼ねて、まずは敵を知ることとて、荒川を遡上、市民消防隊レンジャー部隊創設のための訓練を1泊2日で行おうと思っている。ご参加したいという方がいたら、よろしくお願いします。

☞ 4/28-29 に訓練を実施しました！

裏表紙「訓練中」のテント写真など参照

ボートの活用でちょっと一言 Q&A

Q (N) ボートについて、傷んでいるとお聞きして、ゴムボートは経年劣化になるのか？使いかたが荒いのか？

A (T) おっしゃるとおりで、使い方も荒いかもしれないが、経年劣化、接合部分の接着剤がだんだんはがれてきたり、傷がついてそこから穴があく。そのところを埋めて補修しながらという形でやっている。一か所穴止めるとまた別のところが…。空気圧を高めるといろんなところに負荷がかかって、弱くなったところから壊れる。先日はあまりにも空気漏れの箇所が多いので、コーキング材で埋めてしまった。補修状況確認のためにもGWの訓練は欠かせない。

Q (W) ボートの新調ができるお金や力は？区からの援助の仕組みはあるのか？

A (葛飾区 O) 地域の底力事業、宝くじの交付金を使ってゴムボートを購入している町会もあると聞いているが、七丁目町会では自分たちの資金で購入されていると聞いている。

“地域の防災のこと・安全・安心のためだから、手続きの簡単化してほしい”

(N) 新しいのを1艘買わなければいけないと話をもらっている。地域の底力事業でお金をくれるが、手続きがとても面倒くさい。

書類がちょっと違うだけで、たとえば、何人で訓練をやるか？100名ぐらいといい、写真を出して70名しか映っていないなど、重箱の隅をつつくような指摘をされる。やるのは地域の防災のことなんだから、書類を出したら、すぐお金をだしてくれないと困る。

本当に細かい、忙しい中何回なおしたか。スタンドパイプをやったときも、何回も字の間違いなどを指摘された。安全・安心のためにやるのだから、手続きの改善をしてほしい。申請したらお金を持ってくるぐらいの気持ちでいてほしいものです。

町会のボートは、なんとかして今年買うのでよろしくお願いします。申請があったら、簡単に助成していただけるように検討をお願いしたい。

◎女性市民消火隊 発足します

“地域にいる女性たちの力を”

(T) 市民消火隊は七丁目では実働12・13名(名簿では20名前後)。男性ばかりで高齢やお勤めのかたも多く、平日昼間にもし何かあったら対応できないのではないかということから、日頃地域にいる機会の多い女性たちにもぜひ力を貸していただきたいと声掛けをしたら、女性市民消火隊を結成した。

必ず出動してもらうというのではなく、配備されているD型ポンプの使い方を覚えてもらい火災が発生した時に火を消せる可能性をもっておきたいというコンセプトで結成した。今日は3名参加してくださっている。

今日初めて輪中会議に参加していただいたが、どういう気持ちで参加したか？

(O) 地域のためになにかしたい、けど何をしたらいいかわからない、という女性陣で結成し、参加させてもらった。右も左もわからないが、ご指導よろしくお願いします。

(H) 内閣府とともに七丁目町会の支援していたコンサルに所属。女性市民消火隊を結成するということで声を掛けていただいて、住んでいるところは千葉だが、広域連携としてやっていきたい。

天気や鉄道の情報も好きなので、情報の利活用による安全な避難についてなど、いろんな方と取り組み、もっと安全な避難ができる街にしていきたいと思っている。よろしくお願いします。

(P) わからないことばかりだが、やる気はすごくあるので応援してください。

(T) 4月の町会の総会で承認されて、活動をはじめていく。広域連携ということは私もいま初めて聞いたが、七丁目の人はうまいことを言うなあと感心している（笑）

■（塩崎コメント）

話を聞いているとボートの訓練は、年々さまざまな状況に対応できるように、毎年訓練のレベルが上がっている。来年も報告を楽しみにしています。

女性市民消火隊も発足され、いろいろなキャラクターの方が新たに加わっていて、新しい動きとして楽しみにしているので今後に期待します。

☞ P.17 合同ボート訓練

◎北地区連合町会全体で合同訓練

“大変なイベントです ・ 願う！訓練の許可の簡単化を”

（青柳）2018年6月10日に北地区連合町会全体で中川で合同訓練をした。

練習をするには行政の許可をとらなければならない。消防署、荒下、警察署など。書類を逐一持って行って許可をもらわなければならない。

6月10日は9自治町会が一斉に立石の緑地公園に集まり、中川で救助物資輸送訓練を行った。ジェットスキーと一緒にになると、波で困る。警察にレジャーボート自粛の要請をしていただき、当日はスムーズに訓練ができ、有意義な訓練になった。

毎年という話もあったが、非常に大変なイベントで、一年おきぐらいにやろうと考えている。せっかくエンジン付きゴムボートが活用できる体制をとっている、活用していきたい。

NPOも1台所有している。地域に災害が起きた際には、連合町会で自由に使っていていいという協定書をいただいた。地域のために大いに使っていきたい。

☞ P.106-108 協定書

◎はじめて参加した方々より

・西新小岩五丁目 Hさん

参加したくて仕方なかったが、お誘いがなく参加できていなかった。顔を知っている方も多くいらっしゃる。

・高砂一丁目 Oさん

初参加で、勉強になった。

中学生諸君、日頃研究・行動ありがとうございます。願いがあります。

アンケートにも書こうと思ったが、地域の危険物、たとえば電柱、変圧器、いつ倒れるかわからない。2・3mの塀もある。倒れたらどうするか？近所にフォークリフトがあるうちがある。わたしもチェックしていたら 50m 以内に 3 件ある。そういう調査をやって、防災マップをつくっていただきたい。

また、高いところに逃げると言っていたが、高いところにいる人はどうか？高所難民？か。電気がなく、エレベーターも使えない。そういうときにどうするか、という研究もしてほしい。

役所の方に防災マップを見せていただいたが、私は 15・6 年前から役所に再三言っているが、荒川・江戸川のシミュレーションがあるが、中川のシミュレーションをいまだにつくっていただいていない。うちの町会だけ真っ白である。

中川と新中川に挟まれ、南には野球場があるので、スーパー堤防に囲まれている(?) から大丈夫と説明されるが、警察・消防署はお腕の中に住んでいるからいち早く逃げろ、と指導をしている。なぜ中川のシミュレーションが出ないのか？と思っている。

■参考> すでに計画規模でつくったものは発表されている。下記ホームページを参照。

☞ <http://www.city.katsushika.lg.jp/kurashi/1000063/1004031/1004780.html>

今年公表するなかでは、中川の最大規模も公表する。白抜きになっけていても、周りを囲まれている地域は広域避難をするという考え方。

・たまり場カフェの松島さん

☞ P.83 「たまり場カフェ・葛飾」

たまり場カフェかつしかの目的は、なにか聞きたい、おかしいな、ということをもみんなが相談する場所

いいなと思ったことはイベントにする。

最近 NPO ア！と最新技術による防災のことをやった（第 3 回）。天サイ！まなぶくんはすごいと思った。

第 1 回目は葛飾区危機管理課長さんの話も聞いた。とにかく逃げなさいと言っていた。第 2 回は気象庁職員さん。これからは異常気象の時代。世田谷で大雨が降ったとき、すごい床上浸水になった。葛飾区ももちろん、浸水する場所がある。マップも見せてもらった。写真はもらえなかった。

本当に心配なのはインフラ整備で、下水道も 50 mm でつくっていて、間に合わないから 80 mm になっている。

心配だったのは、国交省の高規格堤防はいいと思うが、直近の問題として、京成の堤防が低い。荒下の作った「荒川氾濫」の映像を見ると、そちらを先にやってほしい。

■編集会議より> 世田谷区と異なった地形の葛飾区はゼロメートル市街地であるために日常的に 24 時間ポンプアップで、排水をしている。ごく普通の雨で地表が水浸しにならないで、私たちが安心して暮らしている所以である。みなさんも、天サイ！まなぶくんでまちあるきをしてみましょう。必要があれば NPO までご連絡ください。

・北地区センターの斜め向かいの鈴木さん

コミュニティカフェ的な要素をもちつつ・・・情報交換をしていけるような場所をつくりたい・・・。

☞ P.84 鈴木さんの寄稿

北地区センターの斜め向かいの、「福井」と書いてある洋服屋の娘。10 年以上前に父が亡くなり、店はもう閉まっている。なんとか店を開けて、コミュニティカフェ的な要素をもちつつ、地域の情報発信や、古い建物でもあり災害に弱い建物だがリノベーションして店をあけたい。災害のことが気になって、自腹をきってリノベしたのに浸水したらどうしようという心配があった。（加藤研究室の塩崎さんからたまたま輪中会議を呼び掛けられて今回初めて参加した。

小学校からずっと東新小岩 4・5 に暮らしていた。この地域の商店街や高齢の方もいらっしゃる、若いママ、小さな子、生活のなかでどう関われるかは分からないが、皆さんといろんな情報交換をしていけるような場所をつくろうと思っている。すぐにはできないが、これから徐々にやっていきたいと思う。

・かつしか FM 葛西さん

☞ P.82 防災番組放送中！

以前、かつしか FM で番組をしていた。いまはいろんな町で災害時にたすけあえるまちをつくるまちづくり系の仕事をしている。今年 4 月からまたかつしか FM で、防災に特化した番組を毎週金曜日 12 時から 2 時までやることになった。今回輪中会議でお話を伺ったこと（を伝えたり）、皆様にもどんどんご出演いただいて、葛飾区の防災力を UP できるように尽力したい。

・時間マネジメントコーチ O さん

上中 PTA 本部役員、七丁目町会女子市民消防隊 でもある。なにかあったら。ママたちが他人事と思う、してもらえらるだろうと思っているママさんが多い。町会の皆さんとママたちを繋げられる何かができたらと思っている。

★小・中学校、地域の保育園から

◎上平井中学校 2018 年度活動報告（地域防災ボランティア部）

☞ P.58-61 地域防災ボランティア部 活動報告

1 年間の活動報告 / 調査内容 / 昨年の輪中会議での疑問への回答

中学生による区役所・大田さんへの質問

2018 年 9 月 13 日、上平井中図書室に区役所の大田聖家さんを招き、避難所

の生活などについて尋ねた。

・アレルギーがある人は？

―避難所の設営をしている町会の方に言えば、アレルギー対応食をもらえる。

―自分の備蓄にも入れておくとよい。

・区役所の発電設備は？

―地下だけでなく屋上にも発電設備があるが、しかし区役所が機能するための全部の電源はまかなえない。奥戸スポーツセンターが区役所の役目を果たす可能性がある。

・町会の運営は？

―区役所や町会の方が小中学校などに避難所を設営する。3日間避難所を運営した後は、区役所の方は戻り、町会の人に引き継ぐ。

・水害時、鉄道はどうなるのか？

―鉄道会社が前日などに運転を見合わせる可能性がある。

去年の輪中会議で地域の方々へのアンケートで出た疑問・質問

1. 公衆電話の位置

・インターネットで確認が可能

「公衆電話設置場所検索」で検索！

2. 未就学児・高齢者の避難

・自治体が避難行動要支援者名簿を作成し支援を行う

・事前に生活に必要なものを用意しておく

3. ペットの避難

・災害時におけるペットの救護対策ガイドラインをよく読んでおく

・個人で備蓄しておく / ペットに名札をつけて迷子対策をする / ケージや他の動物に慣らしておく / (機能していれば) 動物病院などに預けておく

・いずれにしても、しつけをしっかりとっておくことが大切！



新小岩周辺の公衆電話の位置
(「公衆電話設置場所検索」より)

クイズ！

津波発生！最初にとる行動は？

1. 波でサーフィン
2. えら呼吸に変える
3. 高いところに逃げる
4. 走って逃げる

→答えは **3番**！

質問・コメント

(渡邊) クイズで「高いところに逃げる」となっていたが、今朝の新聞で南海ト

ラフで高齢者に「高いところに逃げろ！」と言われてもすごい階段を登らないといけない、どうするんだ、という疑問が書かれていた。電気が止まると高層ビルのエレベーターも動かない。クイズです。いったいどうするのでしょうか？

(塩崎) 逆にクイズが出されましたが・・・(笑)

(Y) 元気な大人が数人がかりで連れて上がってあげる？

(塩崎) 実際に日頃から訓練している町会のみなさんもいると思うが、人を一人運ぶというのは大変だと思う。実体験した人がいれば体験談を聞かせてもらえないか？

(T) 高いところに逃げる訓練はあまりやっていないが、先日停電した時にエレベーターが止まってしまい、車いすの方を 6 階まで運んだ。最低 3 名ぐらいは必要になってくる。大きな課題だと思う。

葛飾区さんのほうでご指導いただいて、担架を作って運ぶ方法もある。また、簡便な昇降機、介護現場でも使われているスカラーモービルというものがあり、お年寄りや障害をお持ちの方などを座らせたまま階段を上り下りできる。1 人いればその作業ができる。

(加藤) 西伊豆の土肥温泉で津波防災地域づくりをやっているが、そこは 6 分で 10m 来る。揺れが少し収まったらスタートを切れるが、実質 3 分間で山の上に逃げなければならない。若い人はなんとかなるかもしれないが、お年寄りはしんどい。今の技術では答えがないという状態。しかし、技術でなんとかなるかもしれないということで、新しく考えている。

発想の転換も重ね合わせが必要。津波避難ボタンを押すと自動運転で物凄い速さで行ってくれるとか。横に逃げるから難しいのであって、縦に逃げれば簡単なので、飛ぶ。ドローンの会社で聞いたら「面白いですね」と言われ、3 分の 1 のモデルを作った。理屈上飛べると言っていた。ただし、お金がかかりすぎる。技術的には可能であるので、そういった方向で考えるのもいい。

(渡邊) ただ高いところに逃げる、が正解だと思ってしまうのではなく、さまざまな想像をして議論を深めたい。

(N) えら呼吸に変えるというのは面白い発想！一言聞きたい。

(T) 水＝魚という発想が出てきた。

(塩崎) 加藤先生が上に飛べばいいと言っていたが、その発想は先を行っていて、水をかぶって飲み込まれても大丈夫だという状態を作ろう、ということ。潜在的にはいろいろな考え方があんじゃないか？ということかな。

◎出前授業の報告と次の展開

“子供たちがマイタイムラインづくりを体験”

☞ P.63-67 地域の中での学び
P.68-69 各小学校長からの寄稿

(竹本) 現在私と七丁目町会会長の中川さん、寺島玄さん、大学から南さんが講師をしている。近隣の小学校、上平井・上小松・松上・二上の4校に出向いて、学校によって学年は違うが年に1日2日ずつやっている。地域の取り組みや研究者の取り組み、過去のカスリーン台風の体験談などを授業の中で子供たちにお知らせしている。狙いとしては、子供たちにこの地域が災害に弱いということを知ってもらい、どのように対策していったらいいかという話をさせてもらっている。

私の授業では、内閣府と葛飾区・東京都の方と一緒に考えている「マイタイムライン」を資料にして、水害が来る1日前にはみなさんどういう行動をとろうか、6時間前には、寸前には、と子供たちに投げかけ、それぞれ対応・対策を考えてもらう授業を進めたりしている。

☞ P.64-67 小学生のマイタイムライン

南講師は水害の怖さばかり話をするのではなく、楽しい面、水に親しむほうの親水についてもお話をしてもらっていると思う。

(南)「マイタイムライン」は、こういう災害情報などが出た時に、こういう行動を自分はします、と事前に宣言して書いて普段から備えておくというもの。今年度大人の方たちに配るが、その前に小学生に簡単に考えてもらったらどうかというのが竹本さんのアイディア。子供たちからは素晴らしい意見が集まった。

楽しい話としては、加藤研のKさん(韓国からの留学生)が、韓国の親水空間の事例を紹介して、話している方としても楽しかったし、子供たちからいろいろなアイディアをもらう場になっている。

いま大学の人材も少なくなり、すごく講師が不足しており存続の危機。皆さん、町の方はいろいろ知識・経験をお持ちだと思うので、ぜひ一緒に小学校に行って話をしてくれる方が出てきてくださったらと思っている。

(塩崎) 私も金沢に出てしまったが、講師が本当に不足している。もしもどなたかやってもいい方がいたら、あるいは地域防災ボランティア部を出て高校生・大学生になった方が戻ってきて講師をやってくれる人が出てきてくれたらうれしいと思う。

“考え方が広がった 地域防災ボランティア部での3年間” ☞ P.62 小豆嶋くん寄稿

(小豆嶋) 上平井中をこの間卒業した。3年間地域防災ボランティア部で学んできたのは、ここら辺の地域が、災害が起きた時に大変な被害を受けてしまうということ、そこから自分たちだったらどうしたらいいかということ、中学生の目線から3年間一生懸命考えてきた。とても難しい問題だと思う。

輪中会議にいつも参加させてもらって、いろいろな人からの意見をたくさん聞いて自分の考え方も広がった。高校生になってからも伝えられる面では伝えていきたい。高校生になったので、中学生とは違う目線を生かして活動していきたいと思う。3年間ありがとうございました。

（顧問 太田）本日は発表の場を設けていただきありがとうございます。今日発表したスライドも全部生徒だけで作り、興味を持っていつも頑張っている。地域の皆さんや、加藤先生、南先生、NPO ア！のおかげでいろいろな機会を与えていただいている感謝している。

（渡邊）前任顧問の M 先生が昨年、中央区の晴海中学校（浸水エリア内）に異動なさって、その中学校でも部活で始めたいが、葛飾のように取っ掛かりがなく、そのうちヘルプを求めるかもしれないと言っていた。交流が生まれることを期待している。晴海は高層ビル群なので、違った勉強になると思う。

（塩崎）いま小豆嶋くんも言ってくれたが、高校生になっても関わっていききたい気持ちがあるとのことで、OB の人たちが地域の中でどうかかわり続けていけるかを、地域や NPO でも議論していただくと、いい活動につながっていくのではないかなと思う。

つぎに、出前授業の地域の中での反応を聞いてみたい。

“町会も大学も応援団・連携しています”

上小松小学校での展開「学校地域応援団」との連携

（上小松町会 Y）30 年度、中川会長にも講義していただいた。塩崎さんたちは直接関わってくれている。私たちは当日応援に行って、子供たちの反応を見ている。目を輝かせて聞いている姿を見ている。町会の大人たちがなかなか防災訓練に参加しないのは、子供のころからの下地がなかったからではないかと思い、出前授業はいいことだと思っているので、今後もよろしく願いたい。

うらら保育園での出前授業

（中村）私もうらら保育園で毎年出前授業をやっている。保育園の園児さんではなく、保護者の方（若い方）にお話をされていて、貴重な機会になっている。

（うらら保育園 S）輪中会議には 3 年ぶりに参加した。☞ P.78 うらら保育園 寄稿
毎年、(NPO ア！の) 中村先生にうらら保育園においでいただいて、在園児家庭＋地域の未就園児など対象に、子育て講座でパネル展示＋講演をしてもらっている。

例年、母・父など＋子供 の参加も増えている。少しずつ防災意識が高まっているのではないかな。生きている私たちに何が必要であるか、地域・地理・地形の

特質について、先生の力をお借りして、少しずつ意識を高めている。

新入職員も講座に参加し、どんなふうに地域で保育や介護をしていくか学んでいる。

★行政から

◎新小岩公園について

“事業手法の発展的再検討のプロセス”

（葛飾区 目黒）公園全体に土を盛る計画で、H28 から共同事業者を公募したが応募者がなく不調に終わった。再公募に向けて検討を進めてきたが、軟弱地盤であり、また仮置きをする場がなく、調整や施工管理が難しいとのことで、ほかの事業手法を検討するとともに、公園利用者にも配慮した防災強化を行っていくことにした。地域の町会長やまちづくり協議会にも説明させていただいた。

東京都の堤防事業も進むので、一体となって、憩いの場としての機能の向上とともに、水害時のヘリの発着場や物資輸送の拠点として機能の強化を進めていきたい。日常・緊急時の検討体制イメージの検討を地域の方々と一緒に進めていきたい。現在、委託業者の選定を進めているところ。新小岩公園防災機能強化検討会。まち協や区民参加型意見交換会をつくっていきたい。みなさんの意見を検討会で検討を行い、地域の町会の方々や地元一般に説明会をさせていただく。

31 年度 6 月の説明会を皮切りに、検討会・各団体での検討を重ねてまとめていきたい。目標としては 32 年度末に基本的な考え方をまとめたい。

東京都緩傾斜型堤防。新小岩公園を堤防の道路と蔵前橋通りが平面で交差する予定。新小岩公園が日常の使い勝手としても、道路と一体となって出入りができるようにするのも、ひとつの考え方。防災上の観点からも機能していくのではないかな。どんな形になるか検討をすすめていきたい。

Q (M) 非常にいいと思っていたが、なぜ変わってしまったか。大切なことだから進めていければと思っていたが、もう少し詳しく説明してほしい。

A（葛飾区 目黒）葛飾区都市計画マスタープランでも高台化が位置付けられており、葛飾区としても新小岩公園は蔵前橋通りや堤防道路、首都高入り口にも近く、災害時の拠点になっていくと思っている。

皆さんと日常の利用も加えて、今後も議論していきたい。少し時間をかけて検討したい。地域の中でまちづくり協議会（新小岩南・北）、その下に一般の方々からも意見を募る意見交換会。それらを取りまとめた形で、地元説明会など行う。

Q (X) 高台化をしないで、水害時にある程度の目的を達する方法が他にあるの

か？高台化を全般的にはしないという結論？JRのほうが下がる？

ただでやるという考えではそれしかないかもしれないが、安全を確保するためには葛飾区が一銭も出さないというのが間違いだったのでは？

A（葛飾区 目黒）公園全体を高台化するのは難しく、手法について別の方法を考えていく。もとは区の負担がゼロ（ゼロ円事業）というのもあった。国の防災高台整備事業（マッチング事業）を使って、公園全体を盛ることを当初考えていたが、手を挙げていただく業者がいなかった。原因は、JRとの近接工事であることなど様々な要因があると考えている。マッチング事業自体は見直すが、新小岩公園の一部高台化については検討を進めていきたい。

■編集会議より＞ 葛飾区の担当の報告を受けて、加藤先生は「浸水対応型市街地構想」についてお話をしました。新小岩公園の進め方、課題も含めて、これは区全体の課題、ヴィジョンです。この課題は2部のテーマでもあり、加藤先生は区の委員会座長でもあり、区全体の構想でもあるという事で、そちらへ統合して編集してあります。

◎5 区協議会の報告

☞ P.94 江東5区ハザードマップ

“江東5区大規模水害ハザードマップ（HM）の共同発表”

（葛飾区 大田）荒川氾濫のリスクを共有している5区（江東、墨田、足立、葛飾、江戸川）が集まって、4年ほど前から氾濫に備えて共同で検討、昨年8月に共同で発表した。

例年の台風とは比較にならないような910hPa規模の猛烈な台風がおそってきて、荒川と江戸川が同時に氾濫したらどうなるか？というHM。

江東5区から外の高台に避難しなければいけないことなどを、住民の皆様にご説明するために5区協議会で作成した。

表面左側がどれぐらいの深さまで浸水するかを示しており、新小岩地域は広く3m以上。右側は浸水の継続時間を示しており、新小岩地域は2週間以上は水が引かないという想定。荒川も江戸川も氾濫しそうな台風が近づいているときは、区内にとどまるのではなく、5区外の白抜きになっている地域に避難してほしい。

“250万人避難は難しい、速めの情報、5区共同検討、広域避難等”

裏面左上には、5区共同で避難情報を出すことが記載されている。江東5区の250万人の人が一斉に避難行動をはじめても、すぐに避難するのは難しい。はやめはやめに情報を出すので、それに従って避難をしてほしい。

実際にこれだけの氾濫がおきそうな3日前には、気象情報などから江東5区の担当者が集まって共同で検討を行う。東京で大規模水害が起こる可能性が高いという判断をした場合には、2日前には自主避難情報を、1日前には広域避難勧告を5区共同で発表。

“自主避難情報、どこに避難するか、これから2年かけて検討”

5区の外どこに避難するかについては広域避難の会議体（内閣府と東京都が合同で座長）、昨年度・今年度の2か年かけて、葛飾区もメンバーとして検討していく。今年度末ごろには方向性を示せる予定。経過は来年の輪中会議の場で報告したい。

右側は、東京湾で高潮が発生した場合どうなるか。890hPa程度の猛烈な台風が東京湾を襲うと、港湾設備が破壊され、高潮が荒川などから逆流し、新小岩地域も甚大な被害を受ける可能性あり。確率的には低い・・・（1000-5000年に1回程度と想定）。しかし、地球温暖化が進んで猛烈な台風が東京をしょっちゅう襲うような世の中になってしまふかもしれないので、そのときのことを考えて、検討していこうということをやっている。

◎橋梁架設訓練、すい坊・ち一坊

（葛飾区 大田）2018年度の葛飾区の総合防災訓練では、自衛隊・江戸川河川事務所に協力をいただき、江戸川の柴又公園から松戸市にかけて川幅150mほどあるところに橋梁を架設し、葛飾区側と松戸市側を結ぶという訓練をした。



橋梁仮設訓練の様子（葛飾区提供）

その時に、平成30年2月から導入している葛飾区水陸両用車も初めて河川の中に入り、帰宅困難者を乗せて搬送する訓練を実施した。



「すい坊」入水の様子（葛飾区提供）

すい坊は荒川にも荒下の訓練に参加し、入水した。皆さんの地域の防災訓練やイベントにも出動できる。本日もさくらまつりにすい坊が出動している。現在は2台導入している。呼んでもらえれば小さな子も喜ぶので、訓練に呼びたい場合は区役所の地域防災課に問い合わせしてほしい。

◎東新小岩七丁目のマイタイムライン

3年前に鬼怒川決壊時、3000人逃げ遅れて自衛隊・消防に救助された。

それを防止するために、いつだれがどのような避難行動をとればいいのか整理したのがマイタイムライン。葛飾区では東新小岩七丁目がモデルケースとして、地元の協力を経て、昨年度取り組んだ結果が、このマイタイムライン。

☞ P.92 東新小岩七丁目マイタイムライン

今後は、講習会をしながら地域の方と一緒に、実際に避難行動を考えていきながら、区のほうでも葛飾区の洪水 HM の全面見直しをしている。江東 5 区 HM は、荒川＋江戸川＋高潮だったが、葛飾区 HM は荒川、江戸川、中川単独などの想定で見直しをしている。

そこにもマイタイムラインを導入したいので、七丁目で出た意見も吸い上げて反映していきたい。

◎荒川下流河川事務所 近況報告 （沿線再開発課 塚原さん）

高規格堤防の説明と、具体的に西新小岩地区に予定している高規格堤防（スーパー堤防）についてお話をされた。

☞ P.89 高規格堤防について

高規格堤防（スーパー堤防）の目的

普通の堤防より幅広くなだらかな勾配で整備することで、計画規模を超える大規模な洪水でも決壊を防止する。具体的には、堤防の高さに対して 30 倍の幅の確保を目標としているが、実際にはそこまで確保するのは困難。ただ、30 倍の幅を確保できないとしても、堤防の高さに対して、勾配が 1:30 になるように確保するのがスーパー堤防事業。市街地側に土を盛ることにより、幅を確保するのが基本。

高規格堤防（スーパー堤防）設置の効果

想定を上回るような洪水で、堤防を越えるような出水があった場合、基本的には市街地側の家などは崩れてしまう。4 年前の鬼怒川の破堤を想像していただければわかりやすい。スーパー堤防によって土を盛ることで、堤防の幅が確保され、その上に住宅を建てるので、堤防の決壊を防ぐというところでまず効果がある。もうひとつの効果としては、堤防に水が浸透しての破壊による市街地側住宅への影響を防ぐ。もうひとつは、大規模地震等が発生した際、通常堤防では液状化による破壊等が想定されるが、高規格堤防の場合は必要に応じて地盤改良も行うことで、堤防の大規模な損傷を回避するという効果も期待されている。基本的には、洪水や地震が発生した際の河川の構造としての効果となる。

もうひとつは、広域な広場を設置することで、住民の避難場所としての機能を発揮することも期待される。また、災害時の活動拠点として活用されることもある。要は、広域避難場所が一つ設置されることになる。また、まちづくりと一体となって進めるという特徴もある。木造住宅の密集地の区や都の区画整理事業とあわせて行い、まちづくりと合わせて公共施設も整備される。

基本的にスーパー堤防自体、連続して設置できないと意味がないという声もあるが、一部区間の整備の場合だったり、基本的な断面形状が完成していない場合でも、堤防の安全性が格段に向上し、まちづくりとしての効果も期待されているということである。

西新小岩地区で事業として進めようとしているところの概要

- ・場所：大成 HD との共同事業として進めているところ
- ・事業期間：平成 31 年度～令和 9 年度 *2020～2028

中川の堤防と市街地側とは 7m の高さの差がある。これに対し、30H（高さの 30 倍の幅）を確保したいが、そこまでになるとかなり奥になり確保できないため、30H 相当の勾配で盛ることを計画している。

2 年間は設計を行い、3 年後から盛り立てられるように進めていきたい。

大成 HD のところで出水（氾濫）シミュレーション、万が一破堤によって洪水で水があふれた場合の浸水想定をしたところ、浸水面積 26 km²、浸水区域内人口 44 万人となる。水深としては 3m ほどあることが確認されている。葛飾区の説明でもあったように、出水等により被害が発生した場合は広域避難が原則というようなことを聞いているが、こういった高台ができることで、皆さんの避難の候補地としても期待が高まるのではないかとこのところ。

荒下の西新小岩地区での事業についてお願いしておきたい

(A) 葛飾区・荒下の方に要望しておきたい。

新小岩公園、緩傾斜堤防、蔵前橋通りの平面交差、大成 HD のところの高規格堤防。そうすると、中川沿いの道路が大成 HD まで、両面通行が上平井橋から平和橋まで。西 5 丁目エリア、そこが片側通行になっている。そこを両側通行にしてほしいと要望している。

せっかく荒下で大成 HD が高規格堤防になるなら、平和橋まで一貫して交互通行にできないか、ぜひ検討してほしい。

(加藤) 西新小岩 3 丁目。大成 HD 跡地スーパー堤防。10 年後を目指して動き出したと、さらっといわれたが、7m 上がるということで、堤防側はそろえればいいが街側の処理がどうなるか、気になる。

2 年間で設計とのことであつたが、まずは大成 HD が上面をどう使うかが未定。協議をつづけていきたい。

街側の見解なく修正がきかない状態で、どんと出てくることはないように。

(荒下) 端部など、ご意見があればくみ取りながら進められたらと思う。まだ決まっていない

■編集会議より>

“西新小岩地区の高規格堤防事業（大成 HD との共同事業）に関連して、NPO ア！の理事長から、関係者による「協議会」の早期設立の提案などもあります。今号“はじめに”（P.3-4）をご参照ください。

★企業から

◎上平井産業連合会

（東新小岩七丁目町会 T）今回参加いただいた上平井産業連合会。地場産業で70社以上が加入している連合会。本日は副会長のFさんがいらっしゃっているので話を伺う。その後、西新小岩でTAKI Corporationさんという浄水器の開発をしている方にデモンストレーションをしていただきたい。まずはFさんお願いします。

（副会長F）新小岩と奥戸、まだ葛飾全域にはまだいっていないが、名前は上平井産業連合会だが、新小岩北・南、奥戸も含めて広い範囲で企業に携わっている会社が集まってもらっていろいろな工場に関するいろいろなことをやっているが、こういった地域のことについても積極的に参加しようということで、今現在Mさん、M化学の社長ですが、M会長のもとにやっている。隣は滝港運さんということで、運送の関係なんです、新しくTaki Corporationということで、防災の方も詳しく説明していただきたいと思う。今後ともよろしくお願いいたします。

（T）こういったことをご縁に地域の産業界、企業の特性を生かして防災についての取り組みを皆さんと一緒にしていきたいというお考えで来ていただいた。

◎TAKI Corporation

（K）我々はもともと物流、運送をやっていた。本社は上平井小学校の隣にある。そのほか、茨城県の下妻、土浦、群馬県の前橋、埼玉県の上郷に営業所があり、さまざまな配送をしている。ただ、燃料の高騰、人材不足のため、一本では難しく、5年前にエコ環境部という事業部を立ち上げた。我々は開発はしていない。メーカーの特約代理店。

今回紹介する製品は、災害対応浄水器 mizu-Q というもの。その他、電解質の生成素子など、衛生面にかかわる機械の販売・メンテナンス・設置、そのほか HACCP の ISO70000 国際化基準の資格も持っている。衛生と環境の二面で微力ながら協力出来たらと思っている。

mizu-Q の紹介

今回、コンパクトサイズとして出させていただいた。在庫から持ってこようと思ったが、最近会津若松市危機管理課に導入していただき、今月末に地域防災訓練をしたいということで、在庫をあるだけ持ってきてほしいといわれ、今日これから行く。今回はフィルターが詰まっているものしか持ってこられなかった。

○ 一本でどのくらいろ過できるでしょう？——350Lをろ過できる

500ml ペットボトル 700 本分。もっと大きいものであれば、2-3t の水をろ過できる。飲み口は、マックシェイクのように少し詰まった感じで出てくる。マンションの貯水タンクの水、学校のプールの水、家庭だと 4 人家族で 3-4 日放置した風呂の残り湯でも、水道法に適した飲み水になる。空のペットボトルだけ備えておけば、大量の水の備蓄はいらない。その分、他の備蓄に回せる。

3.11 では、食料・紙おむつ・衣服が足りないなどの声。そこで次のような提案した。mizu-Q PLUS と交換用フィルター、空の容器（ペットボトル）を用意し、（水の確保はできるので）ほかの備蓄用品に回してもらう。例えば、シャンプー、ボディーソープ、香りのいいもので、精神的ストレス軽減などへ。

防災用品備蓄だけではなく、通常の生活と同じようなレベルに近づける製品を備蓄しませんか。

“川の水も、海外の水も・・・”

多摩川の水で、水道法の検査を通った。mizu-Q PLUS は中川・荒川の水は、下流でとると塩が入り、水道法には適合していないが、5 社 11 人に聞いてすべて災害時の 2-3 日間のみでは問題ないとお答えいただいている。

普段も海外旅行で他国の水も、これを持っていけば安心して飲める。アウトドアのキャンプの会社とも取引している。山登り、川釣りにも使える。基本は災害対策用だが、普段使いもできる。普段使いするときに、フィルターは流水で洗い、冷たいところ（冷蔵庫など）に保管すれば、350L まで使える。ねづまりしたら交換。大きいタイプは、電力を使わない。災害時に電力がない場合、小さい子供や高齢者も使える。大都市部は自衛隊がすぐに入るが、過疎地はなかなか支援がこられないため、八丈島、父島、鳥島などで導入している。

(Z) 水の話、川の水も飲める、スパゲッティをゆでるのにも、墨汁を入れて飲み干す映像があった。呑む勇気が必要だね。

☆第2部 親水・浸水×まちづくり×ひとづくり

～ソーシャルキャピタル：人間のつながりという資本～

■司会進行 ヤスミン

“親水と浸水”“まちづくり”“ひとづくり”という内容でやっていく。

第2部は浸水対応型市街地構想と「古井戸」の保存の話をします。まず、浸水対応型市街地のこれからを報告いただく。そのあとに「古井戸」の話をします。

◎浸水対応型市街地のこれから

全体が安全・安心になっていく

(区 情野さん) 前回のまちづくりニュース(24号 P.86-87)でも書かせていただいた。イメージとしては、これをもう少し具体化し提案する。

今年、来年あたりは、区の庁舎や公共施設をどう変えていくかというところ。また、民間のマンションにも今後どう協力してもらったり、区が支援するか、などを今後検討する。区の庁舎・学校は、検討が遅れれば遅れるほど、そのまま更新が進んでいってしまう。一部の施設からでもできるようにしていきたい。

江戸川区の学校は浸水対応要素を入れて立替がすすんでいる。葛飾区もできる限り早くスタートすべく準備を進めている。

皆さんの地域の中に、建物や高台地などを増やし、みなさんが安心して残れる場所をつくりたい。

(加藤) まちが変わって、新しいものが浸水対応型としていけると、周辺に対して安全のおすそ分けが行われる。全体が安全・安心になっていく。そういう動きを、今年度早々からはじめていく。

やれることは山ほどあると思う。一戸建ての建物でも、浸水しても被害が少なくてすぐ復旧できる建て方になっていると安心。ここに参加している人それぞれがやれることがたくさんある。

◎浸水対応型市街地構想について

(加藤)：浸水に対応した街づくり検討会 会長

浸水対応型市街地構想 昨年7月と9月にシンポが区主催で行われ、その内容が3月に浸水対応型市街地構想という形でとりまとめられている。基本的考え方はシンポ等で報告されている通りだが、復習を兼ねて説明する。

守る、逃げる、受け流す＝三位一体の対策。守る：これまで治水対策は河川事業で行われてきた。逃げる：タイムラインの話もでた。受け流す：これが浸水対

応型市街地。これは、浸水しても大丈夫な市街地にしていこうということ。長い時間がかかる。市街地側で対策を積み重ねることで、20-30年かけて作っていく。大丈夫とは？まずは逃げられる、命が守れる、逃げ遅れても助かる・生き延びられる。水が引いた後に簡単に復旧ができる。実現するにはソフト・ハードがあり、ソフト：浸水に対応できる地域社会（例：ボート訓練）、ハード：浸水に対応できる市街地形成（例：新小岩公園の高台化）。長い時間をかけて、最終的には安心して住める街をつくる。

やれることは山ほどある。新小岩公園や学校の改修など、やれることはまだまだたくさんある。新小岩公園は以前の広報誌で「いよいよ実現！」と書いてあったが、「いよいよ」ではなくなったということ。実現は目指している。

浸水対応型建築物 昭和30年代の終わりに建てられた有名な浸水対応型建築物：現在の葛飾区役所は、設計者の意図は浸水対応型建築物。区長室からはボートで逃げられるという噂もある。

この建物以降は公共建築物で浸水対応型建築物になっているものはあまり見られない。この裏の新庁舎もなっていない。今後、まちが変わるチャンスを見つけて、必ず浸水対応型建築物にしていくことで、数十年後には安心なまちに。浸水と親水のエンジンにしていこうということ。

水辺空間・魅力的なまちに ニュースレター表紙などに、ヨーロッパの素敵な水辺空間の写真の中に、葛飾の写真がひとつある。並べている理由は、著名なヨーロッパの素敵な水辺空間と比べてそんなに遜色がなく、使い方やデザインを工夫すれば、匹敵する水辺空間になるため。もっと魅力的なまちにすることができる。

2年前の朝日新聞で中川さんコメント「リスクはリスクとしてきちんととらええれば東京で一番のまちになる。100年後を見据えたい」

葛飾は、世界をリードする気候変動への対応モデルになる

いきなり世界はむずかしいので、まずは東京都へ。検討会で議論がなされているときに、東京都都市計画審議会で「東京における土地利用に関する基本方針」の2月のとりまとめは、

「東京東部の海水面よりも低い地域に形成された広大な市街地、いわゆる広域ゼロメートル市街地では、気候変動によって高まる大規模水害リスクに備えて、浸水に対応したまちづくりを進めていく必要が。」

「国などにおける検討等を踏まえ、広域ゼロメートル市街地における都市開発諸制度などの活用による浸水対策について検討」

「低地部において、かさ上げた公園や住居の整備を行うなど、市街地整備の面

からも浸水対策を促進」
と位置付けている。

さらに国へ。国土交通省から声をかけられて、この 2 か月のあいだに 3 か所ぐらいの部署でプレゼンした。2008 年に新小岩宣言で「新小岩から世界へ」と言っていたが、大げさなことではなく見えてきた。

その入り口として、この一年で、葛飾区では、**浸水対応型市街地構想**という形でまとめられた。

新小岩公園の高台化なども、別の方法を考える。どんな機能をつけるのか区民の方とともに考えていく。

ソーシャルキャピタル つまり人間のつながりという資本

先にも言ったが、最悪ストーリーはリスクだけのレッテルを張られるなど極端なことを言い始めることだ。危ないのも個性、水はリスク想定を上回る個性・魅力がある。まちをいいかたちにして、リスクもまちづくりの資産にもなる。世界に示していくということが重要なポイントと思っている。

お金の資本だけでなく、ソーシャルキャピタル、つまり**人間のつながりという資本**というのも重要。

災害の危険性があるという結果、こういう集まりができています。お金にも換算できるようなすばらしい資本が蓄積されている。未来に向けた、いいまちづくりをしていける。こういう流れを前向きに考えていくようにお願いしたい

★自由意見交換 ～新たな提案も含めて～

地域活性化のアイディアの提案 “プラス思考でライトアップを”

(中川) 葛飾区さん、森永の裏に桜の木が 50-60 本ある。1 本 1 本**ライトアップ**してもらえないか。3 日に散歩に行ったら屋形船が来ていて、一杯飲んでいる。あんなに素晴らしい空間。スカイツリーも見える。水面に逆スカイツリーがうつる。ところが、前にある桜が真っ暗！

きのう千葉に行ったら、直径 10 cm 程度の **LED** できれい。来年の花見は森永裏で屋形船にみんなきていただけるようにしていただけると、地域のアピールになる。

文化的資産も生かして快適まちづくりを

(渡邊) 今日来てから、地下鉄の駅で観光客向け地図を入手した。観光目玉はなぜか葛飾のところには固まってある。東京全体を眺めると葛飾あたりに固まっている。文化的資産を生かして、親水と合わせ安心快適楽しい街づくりを進めてほしい。

中学校 OB たちの活動を支援しよう

(ヤスミン) 中学生へ。OB がどう活躍するか。どういう仕組みがあれば活用しやすいか？

(小豆嶋) 地域の方との活動がある、小学校での授業に参加、講師するなどもある。

地元のさまざまな活動と情報交流できる仕組みづくりを

(K) たまり場、洋服やリノベ、新しい話だった。たまり場カフェの松島さんが、「荒川氾濫」の映像を見た方がいいと聞いたが、中学生はみんな見たことがある。

(O) 私は時間マネジメント講師をしている。竹本さんと、小さい子供を持つお母さん向けの講演会に行ってきた。乳幼児を持つお母さんに対するアクセス手段が弱いのがこの集団。(輪中会議ついて) 向こうも情報を欲しいと思っているが、つながらない。

広域避難とは

(西五丁目 N・T) ハザードマップでは、広域避難しなさいで終わっている。親戚や知り合いがいる人はいいが、つてのない人が外に逃げた場合、どうするんですか？そこまで決めないと机上の広域避難論になってしまう。

議論がどこまで進んでいるかわかりやすくなるといい

(K) まだ正解まで行きついていないから、正解を求めて議論している。どこを議論しているか一覧で見られるといいですね。

「こんなことをしています」という一覧がほしい

(O) たまり場カフェを運営していて、輪中会議には、はじめて参加した。こんなことやってきたというのが一覧になっているといいのでは。

■編集会議より> 系譜を作っています。ニュースレターにも入っています。ホームページなども参照ください。ぜひ、これまでの活動をみてください。地域で連携して行われているモデルとしてご覧いただき、どのエリアにも普及するとよいと願っている。

☞ P.120-125 取り組みと系譜

系譜とは別に、活動のベースとなる入門書がほしい！

■編集会議より> ベースとなる知識の部分を 30 分ぐらい勉強すればいいという入門編があるといいね。という提案も受けて、次号に加藤先生からも助言いただき作成を目指したい。出前授業で使っているパワーポイントも生かせるかも。

参加しやすい、参加のきっかけづくりをつくろう

(K) 輪中会議にも新しい方が増え、女性比率もあがっていい感じ。参加のしやすさ、きっかけづくりなど、皆でつくっていこう。

★「古井戸」の復元と活用

■編集会議より>

なぜ古井戸の復元・活用が重要か。

その存在は、ゼロメートル市街地の生き証人である。このゼロメートル市街地のモニュメントとして葛飾区の文化財にも指定されているものである。

◎古井戸と地盤沈下

(南) 今回復元している古井戸は、東京都第五建設事務所（現在建て替え中）にある。もともとは頭だけが出ていたが、地盤沈下で大きく下がったことが分かる、歴史を語る井戸として文化財に指定されている。昭和13年に設置されたということで、80年近く経っており、その間の地盤沈下を物語っている。

地盤沈下の歴史をおさらいしておくと、東京東部一帯が海面よりも低い。新小岩北地区でも東京湾の干潮面前後ということで、ほぼ常に海の下にある地域ということになる。

新小岩に一番近い地盤沈下の観測点は江戸川区大杉の観測点。ここでは大正から昭和初期にかけて地盤が沈下。戦後になって高度成長期から1970年代半ばにかけて1m以上沈んだ。江東区では、戦前からずっと沈下を続け、最大5m近く沈んでいる地域もある。もう少し近い地域では、東新小岩・西新小岩の水準点のデータを見ると、いずれも昭和49年（1974年）までの間は年間数cmずつ沈んでいたが、その後は止まっている。

カスリーン台風当時と比べても1.5m程度、この地域の地盤が低くなっている。カスリーンの時以上に酷い被害を受ける可能性があることを踏まえて対策を考えていく必要があるのではないかな。

■編集会議より> 地盤沈下の歴史については、別項（P.72-73）に収録しているため割愛します。

◎ 復元セレモニー等の提案

☞ P.4、P.74-75 復元の経緯

(成戸) 中学生の皆さん、井戸って見たことありますか？いまはほとんど見る機会はないが、先ほどスライドにあった「古井戸」が今年の秋ごろに復元される。この地域の地盤沈下の生き証人。江戸東京博物館にレプリカが保存されているほど、貴重なものである。ようやく返ってくるので、温かく迎え、地域の皆さんにこの生き証人を見続けて行ってほしいという意味合いで、セレモニーをやったらどうかと提案している。

主催は、いまこの輪中会議を主催しているゼロメートル市街地協議会でやったらどうか。いつごろ復元されるのか？いまちょうど五建が建て替えされてい

るが、引っ越しが8月末から9月初旬とのことなので、10月以降がいいのではないかと。東北広場のおまつりや五建との日程調整も必要だが、これから検討する。

(P.75 復元セレモニーのお知らせ：11月30日に開催されることになりました)

「古井戸」が建物内ではなく、自由に入れるように駐車場部分になるように設計してもらった。蔵前橋通りから人間の出入りができ、車の出入りは東北広場の方から。「古井戸」は駐車場内だが、来客用の駐車スペースは休日は空く。その部分や通路を使って、あるいは建物内の大会議室を使ってセレモニーを開催したい。

特に、上平井中の吹奏楽部も校長先生に出演依頼に行こうと思っている。特に小中学生などの若い人に、地盤沈下の生き証人を今後見ていってほしいので、ぜひ参加してほしい。同時に、シンポジウムをやったらどうかと考えていて、これから詰めていきたい。

■編集会議より> 下の写真は、工事に見せていただいた時のものです。復元された「古井戸」が見えます。



工事中の東京都第五建設事務所とピロティ内に復元された「古井戸」

(2019年5月13日、撮影：南)

第 12 回輪中会議を振り返って

塩崎 由人

金沢大学大学院 自然科学研究科

2019 年 4 月 7 日に行われた第 12 回輪中会議では、昨年に続き第 1 部「多様な活動報告」の司会を務めました。今回の輪中会議にも、地域の町会、中高学生（上平井中学校地域防災ボランティア部とその OB）、小学校や保育園の先生、地域の企業、葛飾区、荒川下流河川事務所、大学、NPO 等、多様な組織からたくさんの参加者が集まりました。

地域の町会からは、その取り組みがますます充実していることが報告されました。まず、定期的に中川で行われているボート訓練は、新小岩北地区連合町会のすべての町会が参加した大規模な訓練（2018 年 6 月 10 日）に発展してきています。東新小岩七丁目町会市民消火隊には、女性消火隊が結成されました。これには子育て世代の女性も参加しており、地域での新たな交流のきっかけとなったり、新鮮な視点で新たな取り組みが展開されることが期待されます。

今年も上平井中学校・地域防災ボランティア部の皆さんには、昨年度の活動の成果を発表してもらいました。自主的に地域や防災について学習を進めている姿勢には、私だけでなく、会場にいる人全員が感心させられました。地域防災ボランティア部 OB で前部長の小豆嶋君からは、中学校を卒業して高校生になっても地域の取り組みにかかわれる機会があれば積極的にかかわりたいという発言もありました。NPO や地域が中心となって、小豆嶋君のようにやる気とパワーのある地元の中高生たちが地域の取り組みに継続的にかかわっていける場づくりを支援することの重要性も共有されたと思います。

小学校や保育園で NPO が行っている出前授業についても報告がありました。小学校では、3～6 年生を対象に授業を行っていますが、保育園では保護者を対象に授業を行っており、小さい子供がいる若い世代に、地域とのかかわり方や防災について考えてもらうきっかけになっていると感じました。

行政からは、西新小岩で高規格堤防事業が予定されていること等が報告されました。今後、こうしたハード的な対策が実施されることを踏まえ、市街地のあり方を地域の関係者で話し合っていく場が設けられるといいなと思います。

さらに、輪中会議の新たな参加者には、防災に関心のある人、地域のコミュニティカフェを開きたいと考えている人もいました。輪中会議という場をきっかけに、地域の取り組みの輪が豊かな厚みをもって発展していくことを期待しています。

輪中会議への期待

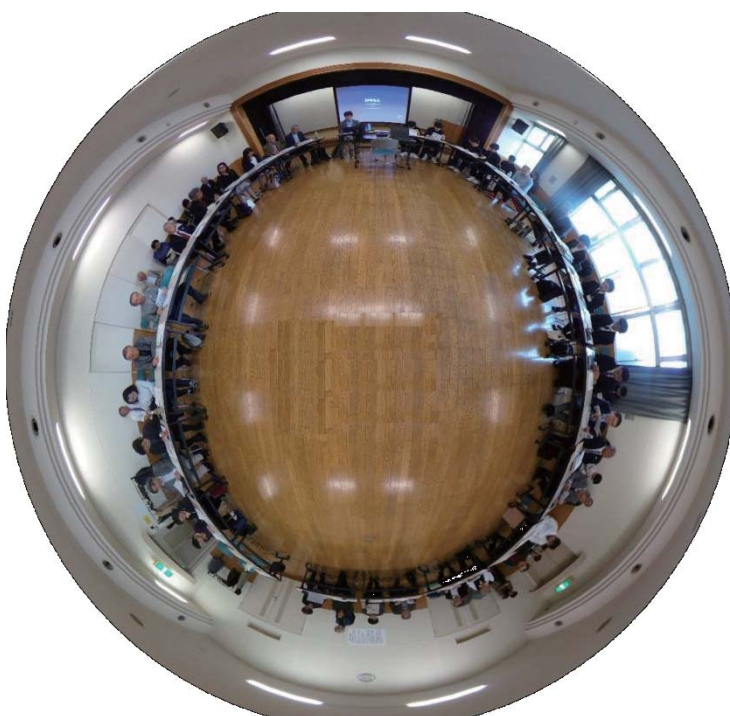
ヤスミン バタチャリヤ
芝浦工業大学 助教

私が輪中会議に初めて出席したのは2013年のことです。加藤研究室に入っただけで、まだ博士課程一年目の学生だった私は、授業でしか都市計画を勉強したことがありませんでした。「地域ベースのまちづくりが大切」とはよく聞くものの、それに携わった経験はなく、その実現がどれだけの時間と労力を必要とし、どれだけの社会連携と共通の住民意識があって初めて成り立つものかは全く知りませんでした。私がそれを自ら実感し、学んでいく貴重な場になったのがこの輪中会議です。

NPO ア！安全・快適まちづくりの皆さんには、輪中会議を含め、水辺の街歩き、上平井中学校の出前授業、災害シンポジウムのパネリストなど、多くのイベントに参加する機会を頂きました。そして、初めて参加した時から6年、今年(2019)の輪中会議ではMCを務める機会を頂きました。

この6年間で私が目にした地域の方の多様な取り組みの成果は、多様で大勢の参加者から一目瞭然でした。内容についても、共通の意識のもと、様々な活動の情報共有・多様な視点からの意見交換がなされ、参加者の皆さんの活発で前向きな発言はどれも、この会議が目標とする「内発性」を表しているように思いました。

NPOの方・地域コミュニティーの方・行政の方・企業や専門家の方の連携システムからなるこの輪中会議は、世界でも先駆的だと思っており、今後もっと多くのキープレイヤーを含め、地域の課題と解決策を考えていく場としての発展を期待しています。そして、個人的にも、葛飾の事例を勉強させていただき、私が今後関わるであろう海外の地域ベースの防災の取り組みに活かさればと思っております。



360° カメラ (RICOH THETA V) により撮影

輪中会議のこれから

渡邊 喜代美

NPO ア！安全・快適街づくり 理事

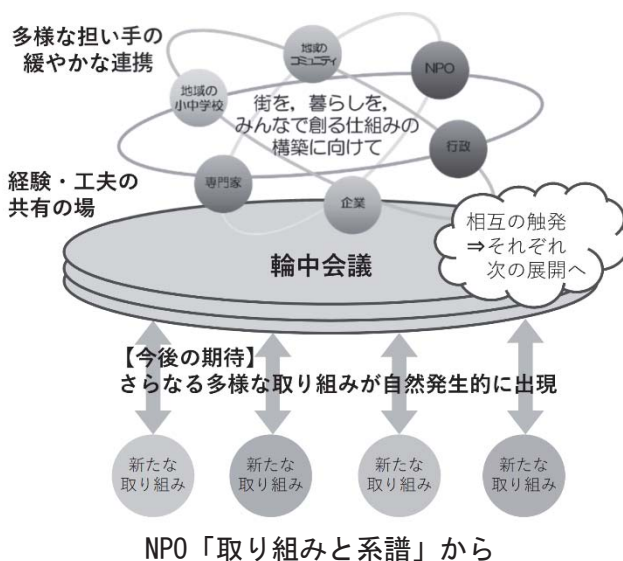
この地域が「安全で、水と緑と安らぎのある東京一番の街」となることを目指して、新しい街づくり、災害リスクと賢く共生する親水都市へ、浸水対応型市街地形成へ輪中会議のような場で検討を深めていきたいものです。輪中会議の“形”は、多様な分野の方々のテーブルとして開かれた協働体制ともいえます。

2019年4月7日12回目の輪中会議の特記すべきことは、地域からの新たな参加が多様であったこと、参加の当事者主体が語られたこと、中学校の活動が持続しつつ進化し、OBが継続参加を発意したこと、地域にコミュニティカフェをつくりたいと思う人と出会ったこと、災害対策用グッズを扱う企業が地元においてグローバル化を図っていること、女性消防隊員が広域連携など、多様多層性が進化した様子があったことなどです。

2012年第1回が手さぐりで始まったことを顧みれば、大変うれしい進展であると思います。

これからの輪中会議は“災害リスクと賢く共生する親水都市づくり”を基本キーワードに①人と人の出会いから発生する創造性②多様多層性から発意される相互醸成③深める研究の異分野連携④地域を熟読した災害リスクと賢い共生⑤惜しみない経験の交流などをあげてみたい。

また、輪中会議は非常に普遍性を持っている“かたち”でもあろう。日本中に災害の実際と予兆があることにおいて、どのようなエリアにおいてもここにおける輪中会議は思いのほか有用な方法といえましょう。私たちはみんなして、他の地域ともこの貴重な経験を共有したいものである。問題や課題をどっかにゆだねる、誰かがやるだろう、と、してしまわないことがこれからは重要である。“てんでんこ”の集合、総合、混合といった印象であらうか。





輪中会議の円卓風景

輪中会議のいいところは、テーブルの並べ方にもある。変形の円ではあるが誰もが水平に渡り合える、向き合える形になっている。これは、ワークショップの経験から、初期に渡邊は提案したものだが今も当然のように準備されます。上座も下座もなく、誰の席も決まっているわけではなく、隣同士は初めての出会いの場でもあります。発言はその場で。このような工夫は、コミュニケーションの取りやすさをうんでいる。中学生も、区のかたも、国のかたも、地域の町会長も、地域のかたも、学生も、教授も、会社の社長も、NPO 理事も、会員も、すべてが水平で並んでいる。

巷でよくある風景は、教室型、話し手は教壇に立つように川上にたっていることが多い。会場から発言しにくく、聞くにとどめることが多くなってしまう。

これは、得策ではない。せつかくの機会を惜しいことにしてしまう。

まちづくりは、どこかのコンサルや行政が一方的にプランを考えて持ち込んでも、ほとんどうまくいかない。大概の説明会は教室型で、意見も交わせず、順調にはいきにくい。コミュニケーションがとりにくい机の配置から当然である。そこに住む人人は、長く歴史や、文化、暮らしを刻んでいく場でもあるから、お仕着せのプランではうまくいかない。とはいっても、住み手がてんでに自分中心に主張しては、これも大変である。

輪中会議はこうした、至って現実的な悩みを解きほぐし、コミュニケーションを呼び戻し、適度な着地、経験の共有を生み出せるいい方法であろう。

<防災“も”まちづくり>という。防災という共有しやすい問題も、むずかしい街づくりの問題も取り組む軸を輪中会議の場なら考えやすい。

輪中会議では多様な人々が育む多様な発想が、柔軟に議論される。このような輪中会議を持ったことは、地域にとってとても幸いである。

輪中会議のこれからは、参加者の多様化と継続こそ発展であろう。



出前授業の風景



水辺フェスタで岩淵水門を見学



上平井中 地域防災ボランティア部



地域防災ボランティア部 加藤研訪問



葛飾区役所 大田さんにインタビュー

学校から



天サイ！まなぶくんに映る小豆嶋くん

地域防災ボランティア部の活動

高田 歩

上平井中学校 地域防災ボランティア部 部長

1. 2018 年度を終えて

今年も輪中会議に参加させていただきありがとうございます。会議では貴重なお話を聞かせていただきました。発表では、パワーポイントにアクシデントが起きたり、緊張したりしてしまいました。それでも、発表を受けて参加者の話が発展する様子を見て、防災に関して考えることがどのようなことなのかを知ることができました。さらに地域の方々の発表を伺って、古井戸に行ってみたり浄水器について調べたりしてみたいと思いました。また、部活アンケートに協力いただき、発表へのアドバイスや評価もいただくことができました。ご助言を参考に、より良い活動ができるよう励んでいこうと思います。

昨年度の活動では、東京大学加藤研究室や様々な方々のおかげで、たくさんの貴重な体験をすることができました。内容は、中川ボート訓練、区役所大田さんへの質問、東京大学や荒川知水資料館などへの訪問等です。二年生が表にまとめましたので、ご覧ください（☞次ページ：1 年間の活動記録）。特に中川でのボートを使った防災訓練では、物資輸送の緊張感、北区防災センターでは、過去の震災の揺れ方などを、それぞれ実際に体験しなければ分からないことを知ったことで、私たちはさらに防災について学べたのではないかと思います。

今年度の活動でも、様々な施設に行き、たくさんの経験をする予定です。他にも、今年はボランティア活動にもより力を入れていこうと話合っています。具体的には、去年より多くのボランティアに参加し、より地域に貢献できるようにしていきたいのです。そして、輪中会議でのアンケートを集計した結果を受けて、備蓄防災用品のありかを調べたり、校内でのアンケートなどを行っていこうと思います。今後も地域の方々や様々な人にご協力してもらおうと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

2. メンバー紹介

1 年生 2 人、2 年生 4 人、3 年生 3 人 計 9 名で活動しています。活動日は原則月・木曜日、必要ならば 土・日曜日です。普段は、防災についての活動をしています。また東京大学、NPO 法人の方々、町内会の方々などに協力していただき校外活動をしています。

3. 2018 年度 1 年間の活動記録

	日時	活動内容
1	6 月 9 日	東京大学加藤研究室を訪問しました。防災について話し合いをしたり、VR を使った火災体験をしたりしました。
2	6 月 10 日	中川水上訓練に参加しました。無線機、ゴムボートを使った水上訓練に参加させてもらいました。(☞ P.17 合同訓練)
3	8 月 29 日	中川護岸工事見学に参加しました。今中川で行われている護岸工事についてどのような目的で工事をしているのかが分かりました。
4	9 月 13 日	葛飾区役所大田さん、東京大学の南さんに地域の防災について質問しました。
5	9 月 23 日	荒川知水資料館に行きました。船に乗船して水門を見学するなど、様々な体験をしました。(☞P.64 水辺フェスタ)
6	10 月 20 日	上平井中学校で学芸発表会をしました。パワーポイントを使った発表をしました。
7	10 月 28 日	上平井中学校で防災訓練をしました。炊き出しや、放水訓練などの体験をし、災害が起きたとき、どうすればいいのか考えさせられました。
8	1 月 5 日	北区防災センターに行きました。煙体験、震度 7 までの地震体験、防災についての知識を学びました。また北区は木造家屋が密集しており、火災、地震の際どうすればいいかなど考えました。
9	4 月 7 日	輪中会議に参加しました。(☞P.35-37 輪中会議 発表内容) 地域の防災について詳しく話し合い、様々な意見が出ていて、次に調べる内容が増えました。



旧岩淵水門の見学



船上から中川護岸工事見学



工事用機械の操縦体験



工事担当者の説明を聞く



北区のまちあるき



学校での放水訓練

4. 輪中会議でのアンケート集計結果

【学校で聞いてほしいこと】

- ・「古井戸」のことを知っている人がどの程度いるか？
- ・水害が来たとき、中学生が地域でできること
- ・防災についてどういった意識を持っているのか、何を望んでいるのか？
- ・災害発生するとき、中学生としてどのような行動と救助ができるか？
- ・中学生や小学生、高校生がもっと防災に興味を持つようになるには？保護者の方々も興味を持つようになるには？
- ・各家庭の中で、災害や避難について話していること（避難先、備蓄等）や話をするきっかけになる出来事

【地域で聞いてほしいこと】

- ・地域住民の防災に対する意識や具体的な対策、要望について
- ・昔、各家の軒下に小舟をつるした家が多くあったことについて
- ・高齢者や障がい者、外国人の方が災害のときにどんなことに困るか？どういう対応ができるか？
- ・各町会の避難計画（特に災害弱者への対応）、各地区の防災対策

【調べてほしいこと】

- ・東京都地域危険度測定調査について
- ・水害時と地震時の避難方法、事前準備の違い
- ・地域の木造密集地について
- ・震災時における弱部調査（上平井中学校の周辺）
- ・新小岩北地区の防災用品や備蓄品の場所
- ・防災、特に「水害」について洪水、津波等の対策、対応を中学生の立場から、どのような活動が必要か、基本に返って学んでほしい
- ・電機設備の改善の度合いについて

【その他の要望・提案】

- ・地域自治会に力を貸してほしい
- ・地域の人々との何らかの連携を模索すると思う
- ・地域防災ボランティア部の卒業生のその後、「あの人は今」的な感じで、各方面で活躍している先輩の話を聞いてほしい
- ・中学校で HUG（避難所運営ゲーム）をやると面白いかも
- ・これまでの活動成果（7～8 年間）のとりまとめを見てみたい

皆様へのアンケート結果や、輪中会議で部員が関心を持ったことの中から、さっそく次のテーマで新聞を作成しました(2019 年 6 月総会で別紙として配布予定)。

スーパー台風 / スーパー堤防 / 西日本豪雨 / マイタイムライン / ろ過器
内水氾濫 / 避難場所

〔地域防災ボランティア部 顧問 太田恵理子先生からのコメント〕

様々な機会を提供していただき、心より感謝申し上げます。経験を重ね、次第に成長していく生徒の様子を、とても頼もしく感じています。今後も地域の皆様と、防災について学ばせていただければ幸いです。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

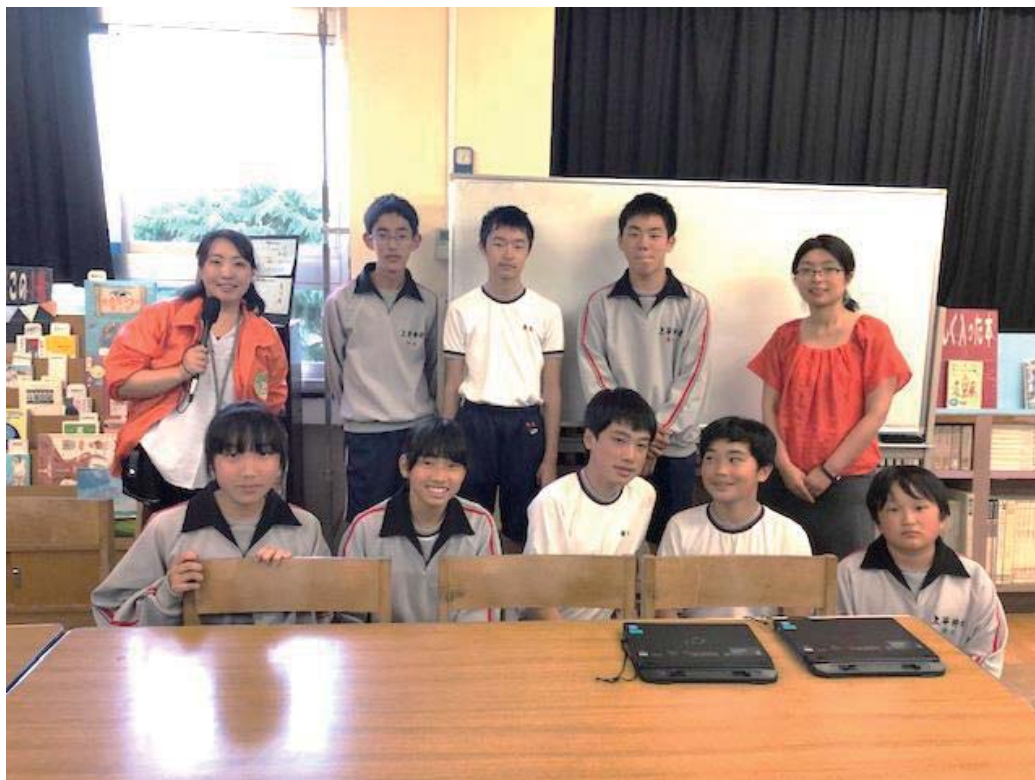
〔かつしか FM に取材されました！〕

輪中会議でできた葛西優香さんとのご縁により、2019年5月30日（木）、地域防災ボランティア部が「かつしか FM」さんの取材を受けました。取材してくださったのは、リポーターの山岸朋子さんです。

内容は、地域防災ボランティア部設立の経緯、活動内容紹介（新聞づくり、校外学習、学芸発表会など）、ちーボラクイズなどなど。高田新部長をはじめ、部員の皆さん＋顧問の太田先生が、緊張した面持ちで取材に丁寧に答えていました。

- 放送日：2019年6月21日（金）13:00～（10分から20分）
- 番組名：かつぼう そなえチャオ！（12:00～14:00 生放送）
- パーソナリティ：葛西優香
- コーナー名：防災ママ～ともこんが行く

☞ P.76 かつしか FM 防災番組 生放送中！



2019年度地域防災ボランティア部メンバー（かつしか FM 収録にて）

連携の大切さとこれから OB として活躍できること㊟

小豆嶋 勇誓

東京都立江戸川高等学校 / 上平井中学校 地域防災ボランティア部 OB

今年度も輪中会議に参加させていただきました。今年度は、部活の OB としての参加で地域の方々をはじめ、葛飾区の職員の方、大学・学校関係の方々からのお話はもちろん、「OB として何ができるか。」という議題にもとても関心をもって会議に参加することができました。

3 年間で学んだ「連携」の大切さ

今年の 3 月、私は中学校を卒業し、地域防災ボランティア部を引退しました。本当にたくさんの方々と交流し、お話を伺い、貴重な体験をさせていただきました。この 3 年間の部活で、防災についての知識がとても深まり、初めて学ぶことは、いつもワクワクしながらお話を伺っていました。

その多くの学びの中で、私が最も大切にしていきたいと思ったことは、『連携』の大切さです。『連携』はたくさんの場面でその大切さを実感しました。

地域の方々と区・都の職員の方、大学・学校関係の方、そしてわたしたち学生。これから、防災についてより深く学び、交流していくためにはこの繋がり、『連携』を大切にしていけないといけないと思います。また、地域防災ボランティア部がこうやって活動してこられているのもたくさんの連携があるからだと思います。地域の方や、大学の方との連携がなければ成り立っていません。様々な意見・お話を伺いして、それをもとに活動してします。これからも、連携を切らず、活動していけたらと思います。

OB として今後に向けて

「OB としてなにができるか。」にも、この連携は関わっていると思います。

私はもうすでに部活を引退した身ではありますが、これからも、部活とは関わり、ときには部活にも参加し、OB として、後輩に伝えられることがまだまだたくさんあると思うので伝えていきたいと考えています。また、中学生のときにはできなかった、小学校への出前授業などさらに連携を強め、活動の幅を広めていきたいです。

3 年間、地域防災ボランティア部に協力してくださったすべての皆様に感謝いたします。ありがとうございました。これから地域防災ボランティア部はさらに活躍していき、発展していってくれると思います。これからも地域防災ボランティア部をよろしくお願いいたします。

㊟編集担当より：小豆嶋くんは、今号から本誌の編集会議に参加することになりました。

地域社会の中での「アクティブラーニング」

南 貴久

東京大学 加藤孝明研究室 博士後期課程 2 年

私が NPO ア！安全・快適街づくりの活動に参加させていただき、小学校の出前授業や上平井中・地域防災ボランティア部の支援をさせていただくようになってから、早くも 5 年近くの月日が経った。出前授業は地域の方を講師に加えて新小岩北地区内の全 4 つの小学校に広がり、また中学生の活動も、生徒たち自らが地域の方に話を聞きに行ったり、ボランティア活動に参加したりと、多様な展開を見せながら広がってきた。

私は災害避難について研究する傍ら、地域資源を生かした参加型の学び、特に生涯学習についても関心を持っており、NPO ア！の学校支援活動を一つの実践の場と捉えながら考え続けている。

「アクティブラーニング」と地域の中での学び

学校現場では近年、「アクティブラーニング」という考え方が広がっている。これは、ただ教科書を読んで、先生の話聞くという「受け身」の学びだけではなく、実際に手や体や頭を動かした「能動的」な学びをすることで、学習効果が上がるというものである。狭い意味では、既存の教科の枠組みの中で、例えば英語の授業で会話を多く取り入れましょう、といった話にも使われるが、より広くは、教科の枠組みを超えて、あるいは学校内にとどまらず地域社会の中で、さまざまな体験を通して自然に知識＋思考・判断力＋社会性・人間性を総合的に体得するような学習活動をも指す。

思えば、新小岩北地区での出前授業や部活支援といった学校支援活動は、まさにこの広い意味でのアクティブラーニングの実践である。児童・生徒たちは、例えば社会の授業で青山士氏による荒川放水路の開削やゼロメートル地帯の歴史について学ぶし、理科の授業では天気の変化や川の流れについて学ぶ。もちろん、こういった知識を得ることも重要だが、やはり実感の伴わない知識はいずれ忘れ去られていく。

しかし、例えば出前授業で実際にカスリーン台風を経験した中川榮久さんの話を聞いたり、部活動で地域の人たちと一緒に街歩きをしたり、川の堤防工事現場を見学したりすることで、こうした教科の学習で得た知識が横につながり、さらに生きた知恵となって身につくだろう。こうした学校の中だけでは得られないような学びの機会を子供たちに提供する橋渡しになれば、NPO として学校支援活動に携わる意義はここにあるのかもしれない。

新小岩版「アクティブラーニング」を目指して

ところで、「アクティブラーニング」という横文字を聞くと、何やら新しいもののような気がするが、よくよく考えてみるとこれは必ずしもそうとは言えないと思う。考えてみれば、自分の子・他人の子関係なく、地域社会の中で大人と子供が自然に関わりながら暮らしていたかつての時代のほうが、広い意味でのアクティブラーニングは（それを学習活動として認識されていたかは別として）ごく自然に行われていたのではないかな。

地域のつながりが希薄になり、また家庭内も核家族化や共働き世帯が増加し、かつて地域や家庭にも多く存在した子供の学びの場が、学校内へと矮小化されてきた。さらに、学校内でも教職員が事務仕事に忙殺され、また消化すべき膨大なカリキュラムにより、教科外の学習機会を考えたくても時間的・精神的余裕がない、という話は、学校現場にいる友人たちからも漏れ聞こえてくる。こうした現状に対する危機感がむしろ、改めて「アクティブラーニング」を声高に叫ばざるを得ない状況を生んでいるという側面もあるのではないだろうか。

新小岩北地区では幸い、人的にも環境的にも学習資源に恵まれている。地域の歴史を身をもって体験してきた人々。次を担う地域人として歩み始めている先輩たち。外部の目から地域の取り組みをサポートし協働する大学やNPO。そして、川に囲まれた素晴らしい街と、そこに生きてきた人々の歴史。こういった資源をうまく繋ぐことができれば、新小岩版の「アクティブラーニング」の形が自然と出来上がってくるに違いない。

実践報告：大人よりちょっと先取り！「マイタイムライン」づくり in 出前授業

平成 30 年度の各小学校での出前授業（☞P.103-105 活動報告）では、地元講師の東新小岩七丁目町会・竹本さんの発案で、地域のワークショップで議論している「マイタイムライン」（☞P.90）を、大人に先駆けて子供たちに作ってもらった活動を取り入れた。

具体的には、大きな台風が東京に接近している状況で、3 日前、1 日前、数時間前のそれぞれの段階でどんな行動をとるのかを、自分で考えたり友達と話し合ったりしてもらい、最後に発表してもらった。

3・4・5 年生向けの授業では、時間帯ごとにどんな行動を取るかを口頭で問いかけ、その都度挙手により意見を発表してもらった。次ページの表 1 は、各学年で出された意見をまとめたものである。

マイ・タイムライン(私の事前防災行動計画) を作成してみよう

◆マイ・タイムラインとは？

“台風の接近や長雨によって河川の水位が上昇する時に自分自身がとる防災行動を時系列にまとめたもの”です。

「誰が」「何を」「いつ頃」行うかを明確にしておくことで、いざ！という時に意思決定がしやすくなり、迅速な防災行動をとることができるようになります。



出前授業での使用スライド

☞ P.104-105 参加した児童の感想

小学生らしいユニークな意見もあったが、3 日前には必要な物資をそろえ、1 日前には遠くに逃げるかどうか判断をするという状況がどの学年でも概ね想像できていたことは驚きであった。また、6 時間前には「やりたいことをやる」「人生を楽しむ」など、諦めざるを得ない状況が想像できていたため、そうならないためには「いつ」「どんな」判断をすればよかったか、と問いかけ、家でワークシートを利用して家族と話し合ってみるように促した。

表 1 3～5 年生の行動想定（項目ごとに異なる児童の発言）

	松上小 3 年生	上平井小 4 年生	松上小 5 年生
3 日前	- 食料を集める - 生き残るための物を探す（懐中電灯など） - 地下シェルター	- 釣り道具を買う（食料をとるために） - 大事なものをまとめておく（ゲーム、食料） - 飛行機に乗ってハワイに行く - 食べ物を買っておく - 友達と逃げる	- 食料や防災用具を準備する - 避難所を確認する - スーパーで爆買いをする - バッグにものを詰めて、避難
1 日前	- 必要な物をバックにいれる - 電車で逃げる	- 県外に逃げる - マンションに逃げ込む（理由を言う） - 服を持って逃げる - 銀行で全財産を下ろす - 荷物をまとめて学校の屋上に逃げる	- 山の方にいく - 魚をとって食べる - 高いところにひなんする - スマホを充電しておく - 非常食を持って車で遠くに逃げる
6 時間前	- 安全な所へ行く - 安全な物をかくにんする - 家の中にかくれる	- 家（マンションの 4 階）の中にいる - 死んじゃうかもしれないから、やりたいことをやる - テンパる	- 睡眠薬を飲んで寝る（?） - 人生を楽しむ - 家にお別れをして逃げる - 一番近い高いところにダッシュ



2019 年 3 月 9 日、上平井小 4 年生の出前授業での「マイタイムライン」考案中の風景

一方、上平井小の6年生の授業では、次ページのようなプリントを配布して、各自で右側の「まわりの状況」を参考にして、左側に自分や家族の行動を時系列で書き込んでもらった。書き終わったところで、代表で2名の児童に、3日前から9時間前までの一連の行動（マイタイムライン）について発表してもらった。

その結果、表2のように、3日前から物資などを準備し、1日前には逃げ、9時間前には避難所で「祈る」という、大人もビックリな素晴らしいタイムラインができあがった。前述のように、3～5年生は6時間前には逃げ遅れによる「諦め」の意見が多く出たが、6年生では2名とも9時間前には安全なところにいるという「成功イメージ」ができていることは特筆すべきことであろう。これが学年による差とみるべきか、それとも紙に時系列の形で書き込むことにより行動イメージが整理されたためであるかは、今後の検証が必要である。

書き込んだ「マイタイムライン」は、家に持ち帰って、家族と話し合ってから改善するように促した。児童自らの学習にとどまらず、家庭でも避難について関心を持ち、議論するきっかけにもなればと思う。

以上の事例のように、小学生でも実践的かつ主体的な学習活動を取り入れることで、大人と対等以上に議論できるような発想を生み出す余地があることが分かる。逆に、大人の側が子供の純粋かつ柔軟な発想から学べる部分も少なくないだろう。

今後も学校内外で地域の大人たちとともに「未来の大人」たちが学ぶことを微力ながらお手伝いできたら幸いに思う。

表2 6年生の「マイタイムライン」

	Aさん	Bさん
3日前	- 食料・水の買い出し - 上着・毛布・着替えをそろえる	家で逃げるのに必要なものを準備する
2日前	- 思い出の品をすべて揃える - 避難所確認 - 天サイ！まなぶくんを見る - スマホを持つ	- 電車で逃げる準備 - 親戚の家に逃げていいか確認
1日前	- 避難所 Let's go! - ライト・ラジオを持つ	電車や新幹線で逃げる
9時間前	避難所で祈る	親戚の家でテレビを見ながら祈る

㊦ 小学校の出前授業や中学生の地域防災ボランティア部の活動支援の輪に加わってくださる方を募集しています。ご関心のある方は、NPO ア！までご連絡ください。

マイ・タイムラインを作ってみよう！

夏のある日、史上最強の台風が東京にやってきたら.....

6年 組

- ・それぞれの時間、どこにいて、どんな行動をとればいいのでしょうか？
- ・どこかに避難をする場合は、いつ、どうやって移動し、何を持っていけばいいのでしょうか？
- ・家族の中での自分の役割は何でしょうか？

あなたや家族の行動

3 日前（もしかしたら起こりそう）

2 日前（本当に起こりそう）

1 日前（いよいよその時が！）

9 時間前（危険が迫っている！！）

まわりの状況

- ・まだ晴れている
- ・とても強い台風が東京方面に向かって、葛飾区から避難の呼びかけが始まる



- ・雨が降り始める
- ・とても強い台風が、明日から明後日にかけて、東京に直撃しそうだ
- ・ニュースで伝えられる
- ・葛飾区から避難の呼びかけが始まる



- ・雨や風が強くなってくる
- ・上流の埼玉県や群馬県で大雨になる
- ・道路が混雑して、車で避難するのが難しくなる
- ・電車で避難する人で、駅が人でいっぱいになる
- ・葛飾区から「広域避難勧告」が発表される



- ・雨や風で歩くのも難しくなる
- ・電車の運行がストップする

- ・「域内垂直避難指示（緊急）」が発表される
- ・川の水位が上がってくる



- ・新小岩地区で堤防が切れ、町じゅうが3～5 m水に浸かる
- ・電気やガスが止まる
- ・助けが来るまでには2週間以上かかるかも.....

時間
の
流れ



6年生の出前授業で使った「マイタイムライン」

家に持ち帰って家族と話し合うきっかけにもらった。

防災教育

堀内 康博

葛飾区立上平井小学校 校長

葛飾区立上平井小学校長 堀内と申します。本校に着任させていただき、2年目となります。今回、お声かけいただきまして、原稿を執筆させていただくこととなりました。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本校でも、近隣の小学校同様、「ア！安全・快適街づくり」の皆様には、出前授業でお世話になっております。昨年度は、3月の授業参観日に、4年生と6年生の子供たちに授業をしていただきました。自分たちの住む葛飾区、新小岩の街の話とあって、子供たちは、真剣に聞いていました。多少難しい内容も、わかりやすくお話ししていただけるので、子供たちの心にも、響いているのではないかなと思います。

☞ P.103 出前授業実施概要

話は変わりますが、私は、昨年度から、葛飾区の小学校3・4年生が使用する社会科の「副読本」の編集委員を務めさせていただいています。「副読本」とは、教科書と一緒に、学習で使用する教材のことです。

4年生の副読本では、「郷土の発展に尽くした人」として、「青山 士（あおやま あきら）」氏を取り上げています。「荒ぶる川」とも言われ、何度も洪水があり、多くの被害を出していた当時の荒川を何とかしようと、工事の責任者に抜擢された人物です。青山氏は、「パナマ運河」建設に、日本人としてただ一人参加した人物でもあります。荒川放水路の工事は明治44年から始められ、のべ310万人もの人々が関わったそうです。青山氏が設計した「旧岩渕水門」は、工事の途中で起きた関東大震災でも、ビクともしなかったと言われています。荒川放水路が完成してから、荒川の洪水による被害は一度もありません。

このようなことを学ぶことで、子供たちは、現在の安全な暮らしが、先人の努力によって作られているものであることに気付き、より郷土を愛する気持ちが深まるとともに、安全な生活に感謝する心が育まれるのだと思います。

地域の方たちと触れ合いながら、また、日々の学習等でも、折に触れ、防災について子供たちが、「考え」「自分のこととして捉え」「日々の生活に生かそうとし」「いざ、という時に自分や家族の安全を守ることができる」ように、学校としても取り組んでいきたいと思っています。

今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

地域の方々から学ぶ

渋谷 英一

葛飾区小中一貫教育校新小岩学園松上小学校 校長

葛飾区小中一貫教育校新小岩学園松上小学校に赴任して、6年目に入りました。毎年、輪中会議に参加させていただいています。今回も、本校の卒業生が上平井中学校の地域防災ボランティア部の部長として発表していて、とても嬉しかったです。小学生から、防災への意識を高めていくことの大切さを改めて感じました。

今回の会議では、広域避難と地盤沈下について学ばせていただきました。前回、広域避難という考え方が有効であることを知りましたが、実際にどこに避難するかが問題です。江東5区としては、親戚・知人宅やホテル、民宿、勤務先などへの避難を検討してほしいと呼びかけています。また、学校の対応として、区の危機管理課から、洪水時の避難確保計画を作成するよう指示がありました。開校中に、避難勧告等の避難情報が発令された場合は、児童を保護者に引き渡すことになります。大地震に備えての引き渡し訓練は、毎年行われていますが、水害時にも、引き渡しの可能性があることを保護者に伝えておかななくてはなりません。地震とともに水害への備えも学校として取り組まなければなりません。地盤沈下については、「東京都第五建設事務所古井戸」について知りませんでした。地盤沈下の実態を知ることができる貴重な古井戸です。この地域の地盤沈下の歴史を知っておくことも大切です。

輪中会議にかかわる学校の取組としては、寺島玄様による6年生向けの講演会、また、3年生5年生対象の地域の学習を継続しています。寺島様の新小岩地域の歴史のお話では、この地域の方々は、水害に悩まされながらも、たくましく生き抜いてきたことが語られました。3年生5年生の学習でも、子供たちの防災意識を高めることができました。

P.103 出前授業実施概要

松上小学校の課題として、備蓄倉庫が1階にあることがありましたが、日本語学級の増設に伴い、3階に移動しました。避難所運営訓練は、10月に行う予定です。これも、毎年、輪中会議に参加させていただき、地域の皆様の熱心な取組に刺激を受け、本校でも、取り組まなければならない、という気持ちにさせていただいていることが大きな力になっています。

これからも輪中会議で学ばせていただいたことを土台にして、本校としての、自然災害への取り組みを充実させていかななくては、と考えております。

水辺フェスタ

山上 忠・南 貴久
NPO ア！安全・快適街づくり

2018年9月23日（日）、北区・赤羽岩淵の荒川知水資料館やその周辺の荒川河川敷で行われたイベント「水辺フェスタ赤羽岩淵 2018」に、NPO および上平井中学校地域防災ボランティア部の皆さんと一緒に参加してきました。このイベントは、全国的な水辺空間活用プロジェクト「ミズベリング」(P.15)の一環として行われているものです。

地域防災ボランティア部では例年、この赤羽岩淵から江東区の「中川船番所資料館」まで、荒川下流河川事務所の保有する災害対策支援船「あらかわ号」への体験乗船を行っていますが、2018年度は乗船予定であった8月8日に台風13号が接近したため、残念ながら中止となってしまいました。そこで、荒川の治水の歴史や親水空間としての活用について学習する機会を探していたところ、このイベントに参加する運びとなりました。

荒川知水資料館見学

まず、荒川知水資料館（amoa）の見学を行いました。知水資料館では、荒川放水路開削の歴史や、現在の浸水想定ビデオ視聴などを行いました。

荒川ミニクルーズ

続いて防災船着き場から船に乗り、ボランティアの方の案内付きで岩淵水門や芝川水門を水上から見学するミニクルーズに参加しました。

防災体験会（岩淵水門見学）

最後に、荒川から隅田川に流入する水量を調整する岩淵水門の見学を行いました。水門についての解説を聞いたあと、普段見ることのできない開閉の様子を実演で見ることができました。さらに、水門の塔の階段を上り、操作室の中を見学するという貴重な体験をすることもできました。



知水資料館見学の様子



岩淵水門の操作室で記念撮影



うらら保育園の入っている建物全景
(象設計集団 Web サイトより)



うらら保育園 遊びの風景
(象設計集団 Web サイトより)

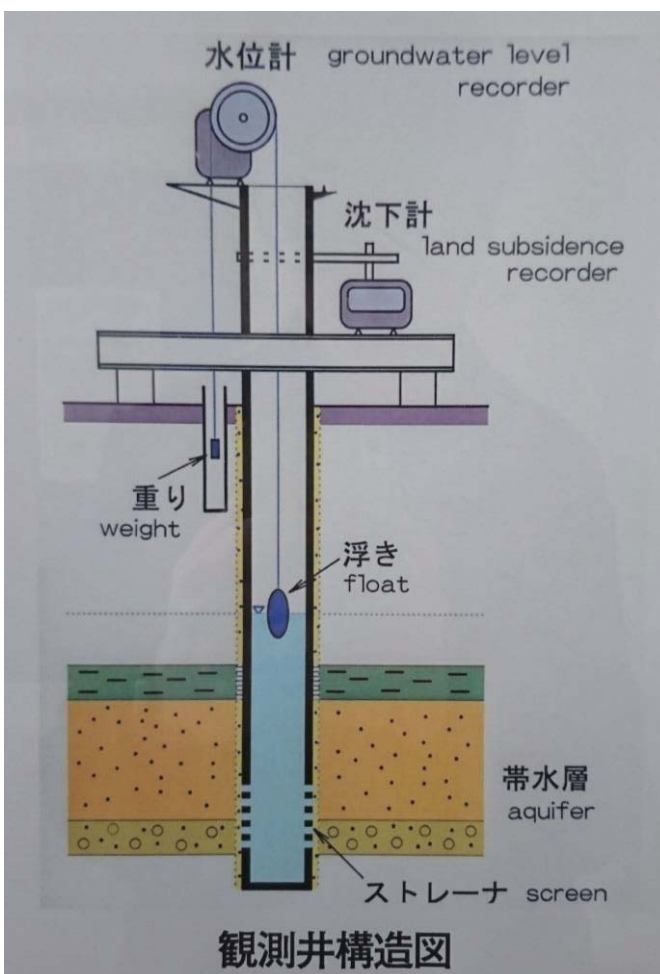
地域から



たまり場カフェ・葛飾
防災イベント 第3回 古川修氏講演にて
VR（バーチャルリアリティ）を体験する参加者



江戸東京博物館での「古井戸」レプリカ展示



地盤沈下量・地下水位の観測機器 概要図
(土木技術支援・人材育成センター内掲示ポスターより。
現在に至るまでこの方法で計測されている。)

東京東部低地帯 地盤沈下の原因と歴史 ～「古井戸」復元を機に 改めて振り返る～

南 貴久

NPO ア！安全・快適街づくり

地盤沈下発見の経緯

大正 12 年（1923 年）関東大震災前後の測量により、江東地区の異常沈下を観測。当初は地殻変動によるものではないかと地震学者から注目され、東京大学地震研究所が調査を開始した。

昭和初期、東京下町で高潮の被害相次ぐ（昭和 9 年 9 月室戸台風など）。井戸やビルの「抜けあがり」が目撃される。このころには、住民が地盤沈下を認識しはじめる。

深川区の郷土史家・町会長 菊池山哉は、頻発する高潮水害が地表面の沈下現象によるものと認識し、『沈みゆく東京』（1935 年）を著した。

「わが深川区は区画整理によって、平面的には完成せりといえども、立体的にはいまだ完成されず」（浸水対応型市街地の原点！？）



東大本郷キャンパスの観測井
（南撮影）

地盤沈下の原因究明

地震学者・地球科学研究者 和達清夫

大阪の災害科学研究所に勤務し、地盤沈下の研究を担当。『西大阪の地盤沈下に就いて（第二報）』（1940 年）において、地盤沈下量と地下水位に関係があることをつきとめる。

ほかにも様々な原因が唱えられたが、戦時中、工場の破壊により地下水揚水がなくなり、地盤沈下が一時的に停止。これが地下水過剰使用原因説の決定的な根拠になった。



和達清夫

戦後：経済成長との葛藤

戦後復興期、工業生産の増加による産業発展が国家的要請となっていた。河川などの地表水は農業用水と競合していたため、工業用水としての地下水の需要が高まった。

《工業用水法》（1956 年 6 月）

「特定の地域について、工業用水の合理的な供給を確保するとともに、地下水の水源の保全を図り、もってその地域における工業の健全な発達に寄与し、あわせて地盤の沈下の防止に資すること」＝ 産業発展が優先で、沈下防止は二次的

規制内容：井戸の届け出義務化 / 揚水量の制限 / 基準外の井戸の新設禁止 /
代替工業用水道の確保（既設井戸は対象外のため効果は限定的）
指定地域：1957：四日市市・川崎市・尼崎市、1960：墨田区・江東区・荒川区・
足立区・江戸川区、1963：北区・板橋区・葛飾区 など

《ビル用水法》（1962 年）

ビルの冷房用地下水汲み上げを規制。工業用水法より基準が厳しかった。

1970 年代：本格的な対策と沈下の停止

《工業用水法 改正》（1962 年 5 月）

ビル用水法に合わせる形で規制対象井戸の
基準の強化、基準外既設井戸の廃止

規制の開始：

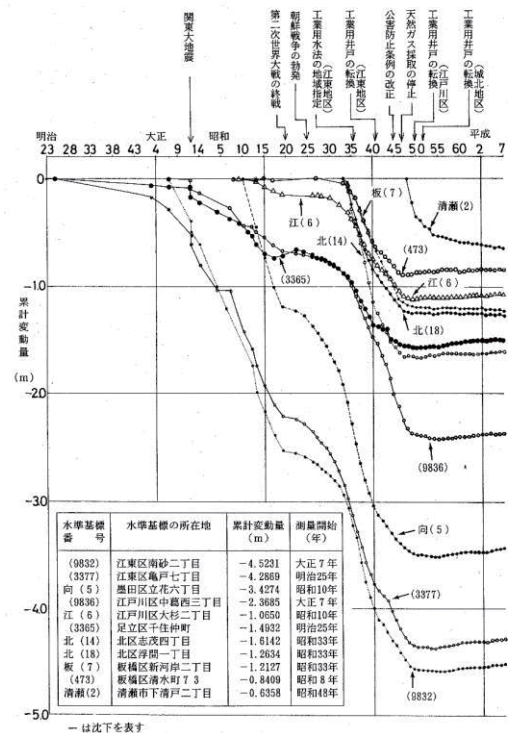
1966：江東地区（江東区・墨田区・江戸川区・
荒川区）

1971：城北地区（板橋区・北区・葛飾区・足
立区）

《天然ガス採取の停止》（1972 年）

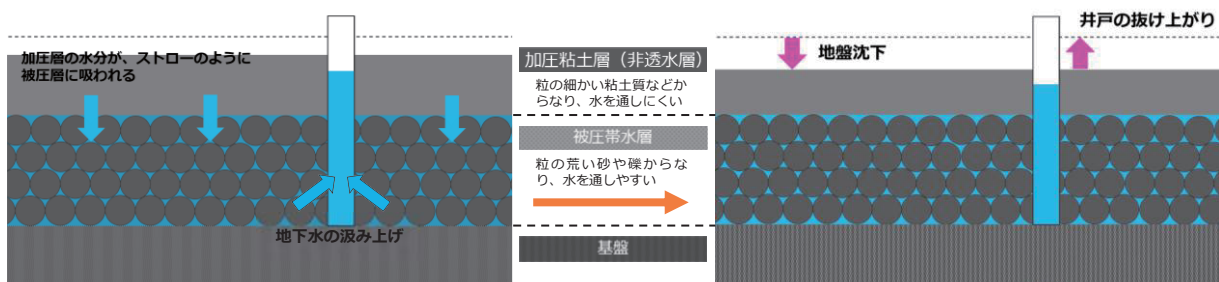
都による業者からの鉱業権の買取

これらの対策により、江東地区では 1965
年ごろから、城北地区では 1970 年代前半から
地下水位が上昇に転じ、地盤沈下も停止し
た。



地盤沈下の経年変化

地盤沈下のしくみ 概念図（南作成）



参考文献（土木技術支援・人材育成センターの松村さんに紹介していただきました）

・守田優『地下水は語る一見えない資源の危機』「第一章 沈む大地」岩波新書、
2012.

・遠藤毅・川島眞一・川合将文『東京下町低地における“ゼロメートル地帯”展
開と沈静化の歴史』応用地質，Vol.42 (2) pp.74-87, 2001.

古井戸の保存について

影山 秀晴

東京都土木技術支援・人材育成センター 技術支援課長

●地盤沈下の発生（井戸の抜け上がり）

明治以降、東京では工業用水の確保や水溶性ガスの採取のため、多くの井戸が掘られ、東部低地帯といわれる地域（図）では、深層地下水の汲み上げによる大規模な地盤沈下が発生しました。葛飾区においても、東新小岩一丁目にある東京都建設局第五建設事務所の井戸の地中部分が、地盤沈下によって地上に1.5m抜け上がりました（写真）。この井戸は、このような由来から、平成24年3月に葛飾区の登録有形文化財になりました。

古井戸が文化財に登録される経緯は、機関誌「ア！安全・快適街づくりニュース」2012年6月Vol.18に、当時のNPOの皆様のご尽力が記録されています。また、本稿が掲載される機関紙にも改めて掲載されていると思います。（P.4）

●事務所の建替え（古井戸の保存方法検討）

平成24年（2012年）6月から古井戸のある敷地の建物（都営住宅・第五建設事務所・江東治水事務所の複合施設）の建替工事が始まることになりました。

古井戸を保存するために、東京都土木技術支援・人材育成センター（以下、土木技術センター）も参加し、専門家に依頼して古井戸の損傷や材質の劣化などを調べました。その結果、古井戸の劣化が進んでいることが分かりました。さびの進行で鉄管の厚さが製造時よりも薄くなっており、抜け上がった鉄管の地表に近い部分には腐食による穴も開いていました。



【図】東部低地帯
（平成24年度建設局資料より）



【写真】五建の古井戸
（建替前）

●古井戸の修復・補強と復旧

今回（2012 年）の建替工事の間は、古井戸を地中で切断し、地上部分を土木技術センターに保存して工事完了後に元の場所で復元することになりました。

切断した古井戸の地上部分の保管にあたっては、劣化を防ぐため酸素と水分を吸着する薬剤とともに透明なビニールの中に密封し、さらに、1 階よりも 2 階のほうが湿気の影響を受けにくく劣化を防げることから、2 階の階段脇のスペースに密封した状態で展示し、地盤沈下の様子を伝える貴重な史料としても活用しました。

上にも述べたように古井戸はさびによる劣化が進んでいるため、復元の方法として、溶接では十分な強度が出ない恐れがありました。そこで現地での復元にあたっては、接合部の周囲の地中部分をモルタルで補強する方法としました。また、地上に露出している穴や、移送時に分離したポンプ部分を補強し、全体はさび止め措置とともに、違和感のないように色味の復元塗装を施しました。

令和元年（2019 年）秋の第五建設事務所の再開時には、建て替え前と変わらない古井戸の姿があることと思います。

㊦編集担当より：「古井戸」復元セレモニーのお知らせ

NPO では、「古井戸」の復元セレモニーの開催に向け、現在準備中です。日時と場所のみ以下に予告します。（☞P.5 セレモニーの目的）

□日時：2019/11/30（土） 13:00－17:00

□場所：東京都第五建設事務所（新庁舎） 会議室



西新小岩五丁目町会の活動報告

町山 光司
西新小岩五丁目町会 会長

当町会は平成 30 年度においては、「安全、安心、清潔な町づくり」を目標に活動を行ってきました。

ゴミ集積所の廃止及び不法投棄防止の取り組み

平成 30 年 6 月より不法投棄の場所となっていた平和橋通りに面した歩道上の全てのゴミ集積所 5 カ所を廃止し、その跡地には不法投棄防止のために都道管理の第五建設事務所に依頼して植栽を行いました。又町内の複数個所の管理不十分なゴミ集積所も同様に廃止し、地域住民、区清掃事務所の協力で分散収集に変えたところカラスの飛来がなくなり、上記の目標の清潔な町づくりを目指しました。

防犯の取り組み

平成 29 年度より開始した、私道防犯灯の LED 灯化を引き続き行い、町会管理の私道防犯灯は約半数以上が更新並びに新設となりました。全ての防犯灯が LED 灯になるよう進め、当町会は、区画整理がされていないため、迷路のような所があり、積極的に新規設置を行いました。

犯罪抑止、事件事故の早期解決の為、新小岩北地区の町会単独での設置は当町会が最初となりますが、都及び区の助成金制度を利用して街頭防犯カメラを 8 台設置しました。これにより当町内の防犯カメラは、区教育委員会設置の 4 ヶ所（上平井小学校の通学路）、区公園課設置の 3 ヶ所（モンチッチ公園 2 台、平和橋児童公園 1 台）計

町 会 員 各 位

第二回街頭防犯カメラ設置説明会開催のお知らせ

会員の皆様には、日頃町会活動にご協力を頂き厚くお礼申し上げます。

さて、当町会では、毎週火曜日に防犯・防火パトロールをはじめ種々の防犯活動を実施していますが、平成 30 年度には街頭防犯カメラを 8 台設置致しました。来年度の平成 31 年度も街頭防犯カメラの設置をし、より一層の「安全・安心・清潔なまちづくり」を推進したいと存じます。

つきましては、下記により説明会を開催いたしますので会員の皆様のご参加をお願い致します。

記

- 1 日 時 平成 31 年 3 月 31 日（日） 開始 13 時 30 分
- 2 場 所 町会事務所 2 階
- 3 防犯カメラの概要及び設置後の運用の説明
警視庁葛飾警察署 生活安全課防犯係長 今岡警部補
- 4 設置箇所(案)の説明（防犯部長）
設置予定場所（区道の電柱上）及び撮影方向
 - ① 5-24-9 （南北、東） ジョリーパスタ裏野原宅前
 - ② 5-25-23 （西、南北） 宮下宅前
 - ③ 5-19-24 （南北、東） 櫛ニシムラ前
 - ④ 5-10-9 （東西、南） 小林ビルに面した道の遠藤宅前
 - ⑤ 5-2-11 （南北、西） モンチッチ公園東出入口
 - ⑥ 5-2-3 （南北、西） モンチッチ公園西出入口
 - ⑦ 5-5-25 （東西、南） レスポワール裏
 - ⑧ 5-19-11 （南北、西） サンパレス新小岩脇

平成 31 年 3 月 1 日

西新小岩五丁目町会
会長 町山 光司

15ヶ所となりました。又来年度も犯罪抑止の強化となるように、「安全、安心、清潔な町づくり」の為の街頭防犯カメラ8台設置を検討しています。平成31年3月31日に第2回街頭防犯カメラ設置説明会を開催しました。

防火防災の取り組み

平成30年10月14日に大規模地震の総合防災訓練を、モンチッチ公園にて実施しました。本年度も東京都地域の底力発展事業助成の対象事業として、

- ① 非常食品持参訓練、参加者は10kgの米持参を実践しました。
 - ② 炊き出し訓練、同公園内の、災害用ベンチと防災倉庫の寸胴鍋による炊飯、炊き出しを実践し、おにぎりを参加者に提供しました。
 - ③ 車椅子活用（5台）の避難訓練、町内の一時集合場所3か所からそれぞれ要支援者を車椅子にてモンチッチ公園迄誘導を実践しました。
 - ④ 消火器による消火訓練、訓練用消火器にて初期消火の実践をしました。
 - ⑤ 消火ポンプによる消火訓練、D級ポンプによる放水訓練を実践しました。
 - ⑥ 応急救護、AEDによる心肺蘇生を実践しました。
 - ⑦ 通信訓練、トランシーバーでの伝達訓練を実践しました。
- 本田消防、第五分団の協力で無事終了しました。

水害発生時の町会員の垂直避難先との相互協力の取り組み

当地区は災害リスクでは、総合危険度ランク5（災害時の活動困難度を考慮した建物倒壊や延焼の危険度）、又地震による液状化の可能性の高いエリアであり近年の集中豪雨、大型台風等の堤防破壊、溢水による水害時の垂直避難先として、従来は避難先として上平井小学校のみでしたが、町内の4階以上、耐火構造のマンションとの「災害時における相互協力に関する協定」を進めてきました。本年度も年末までに、2棟との協定を行い、累計約440名の会員の避難先を確保しました。又協定先には、区より支給の簡易トイレと簡易寝袋の避難人数分の保管をお願いしました。それにより日頃の安心感が向上しました。引き続き同活動進めていく予定です。

浸水と親水 ～川と共に暮らす～

青木 美紀子

社会福祉法人清遊の家 うらら保育園 副園長

社会福祉法人清遊の家は、荒川と中川が流れる葛飾区西新小岩に位置しています。NPO 法人「ア！安全・快適街づくり」の御協力を得て、同じ地域で暮らす家庭を対象としたうらら保育園子育て講座「親子で語り継ぐ大水害時の避難について」(P.103)を開催し、今年で5回目となりました。平成30年度12月に開催した講座では、過去の水害のパネル展示と共に、芝浦工業大学システム理工学部教授中村仁先生より大規模水害について、その傾向や、国の施策や動向、この地域の河川の特性、また必要とされる防災対策の最新情報をわかりやすく説明して頂きました。

参加者のアンケートには「水害に対する意識が足りなかった」「自ら情報を入手することが大切」等の声が寄せられ、全国で多く発生している水害を、対岸の火事と思わず、現実を知り、正しく対策するという意識の変化は、命を守る為の初めの1歩であり、そのきっかけ作りとなる子育て講座となっています。今後も日々、子供達や保護者と関わりを通じて、それぞれが主体的に防災へ関心を持てるような発信をしていきたいと考えています。

輪中会議に参加させて頂き、浸水と親水という言葉がとても心に響き、頭に残っています。川の側で子供達と共に暮らす毎日は、「浸水」というリスクがあることを十分に理解し、万が一の事態に備えていくことは大前提であります。同時に「親水」という観点から、四季折々の恵みを与えてくれる川を身近に親しむ保育をしていきたいと改めて感じました。土手の散歩は、中川避難橋を渡り終えた先に広がるパノラマの景色。対岸にそびえ立つスカイツリー。雲一つない晴れた日に、顔を覗かせる富士山。上平井橋から水門をくぐる船やボートに手を振り、「もう一回！」と次の船を待つ時の子供達の横顔。どれもこの街に住まうからこそその豊かな経験です。子供達の幼き頃原風景に残る川の側にある保育をこれからも営んでいきたいと思えます。



中村仁先生の「子育て講座」



川辺の散歩

水害時避難訓練について

塚田 剛士

社会福祉法人清遊の家 葛飾区つつみ保育園 園長

当保育園では、平成 26 年度より新小岩学園松上小学校のご厚意により、水害を想定した小学校屋上への避難訓練を毎年実施しております。

水害避難を職員と共に考えた当初はハザードマップを広げ、どこに避難すればよいか意見を出し合ったことを今も鮮明に覚えております。

当保育園は都営住宅の 1 階に設置されており、直上階への避難を検討したこともありました。ただ、避難は出来てもその後、水が引くまでの生活を考えると現実的ではないという結論に至り、現在の避難方法で松上小学校にご協力を仰ぐ形となりました。

毎月 1 回実施される避難訓練では火災や地震を想定しているため、園庭への避難がほとんどです。もちろん子どもたちも真剣に訓練に取り組んでおりますが、いつもと違う、園外への避難は子どもたちにとっても印象深いもののようで、いつにも増して集中している姿が見られます。

小学校の門をくぐり、普段は入ることのない校舎の階段を屋上まで静かに焦らず避難をする子どもの姿が毎年印象的です。

火事や地震以上に身近な災害ではない水害は子どもたちにとって想像しにくいもの…。ただ、私たちが暮らす新小岩地区は大きな河川の間近にあり、その危険が隣り合わせなのも事実です。

必要以上に不安にならないように…との思いはありますが、子どもたちがそういった地域に暮らしていることを少しでも実感し、万一の時にはどのように行動すればよいか…を職員や保護者の皆様、地域の方とこれからも一緒に考えていきたいと思っております。



松上小学校への避難の様子

地域防災と消防団

中村隆三・茂木敦史
本田消防団 第6分団

私たち、本田消防団第6分団は、地域と密接に関わりながら活動しています。主に、ポンプ操法訓練や市民消火隊の訓練の指導、地域行事の警戒、水防訓練など、様々な場面で地域と連携しています。

1. 活動審査会 優勝！

一昨年の活動審査会がありました。大会の想定は、災害時の現場から地域住民の方々をスムーズに救出することを目的としたより実践的な大会でした。そこでは、日々の訓練と地域の方々の熱い支援を受け、6分団にとって初めての優勝を経験することができました。この経験により、訓練の重要性や地域の方々の協力の大切さを改めて、感じるすることができました。また、消防団全体の災害への危機意識も高まりました。



活動審査会の様子

2. 求む！若手消防団員

日々の活動の中で、よく議題に上がる問題は団員の高齢化です。本田消防団の充足率も年々低下し、消防団員の若返りが課題となっております。その中で、私たち6分団は、若年層の団員を増員するために様々な広報活動をしております。特に、地域密着型の私たちは、訓練見学の他に、知人や友人に消防団の活動内容ややりがい、重要性について団員が積極的に伝えています。

広報活動の成果もあり、20代の団員が10名加入いたしました。消防団員の若返りによって、若年層の関心が高まっていくと感じました。これから、より多くの地域の方々に認知される消防団を目指し、地域の方々が安心・安全に暮らせる町にしていきたいと思えます。

3. 水害に備えて

さて、近年、一番危惧されている災害は、地震や台風による水害です。

私たち、本田消防団第6分団は、東京東部の荒川と江戸川の水に囲まれた低地帯にあります。そこで、一昨年、救命ボートが分団本部に配備されました。また、各町会も救命ボートを持ち、水害への意識が高い地域になっています。

消防団においては、年に2回、浸水時を想定したボート訓練を行っています。その他、町会と連携したボート訓練も行っています。ボート訓練では、人や物資の運送を行っています。ボート訓練で感じたことは、水の流れは予測できないため、迅速に救命体制を整え、安全確認をしながら人命救助を行うことが必要だということです。



消防団の救命ボート操船訓練

4. おわりに

私たち、6分団は浸水から地域の方々を守るとともに水に親しむことができる街を目指しています。浸水と親水すなわち「しんすい」をキーワードに、この地域が「安全で、水と緑と安らぎのある東京一番の街」となることを目指します。

かつしか FM 防災番組 生放送中！

葛西 優香

かつしか FM / 法政大学大学院 人間社会研究科 福祉社会専攻

災害時にすべての番組が被災情報となる防災ラジオ局「かつしか FM (78.9 MHz)」をご存知ですか。有事の際にすぐに役所の方々と連携できるように葛飾区役所の総合庁舎すぐ横に位置します。私はそこで、毎週金曜日 12 時～14 時、生放送で防災番組「かつぼう そなえチャオ！」を担当させていただいています。

日常生活の中で後回しにしがちな防災を、ちょこっと頭の片隅で考える時間を持つことを目的とした番組です。毎週の放送を通して「地域のつながり」を強め、「防災の新しい取り組み」が生まれることを目標としています。

目標を果たすために、ゲストのコーナーを設けています。各地で地域のつながりづくりを様々な方法を駆使して進められている方をお招きして、日頃実践されている活動についてお話を伺った後に、ゲストの視点で「防災」について話合います。仕事や活動で防災に関わっていない方にもお越しいただき、難しいと思われがちな「防災」を新しい視点で見つめ直します。

また、世代を超えた視点の転換を図るために、学生レポーターのコーナーを設けています。災害時には若い力が必要となります。日常から少しでも多くの学生に「防災」を意識してもらいたい。「食」・「スポーツ」・「昔ながらの街並み」・「地域連携」と担当大学生が週替わりで自分の興味のある分野と防災を掛け合わせて調査をし、月に一度、報告します。地域と大学が連携する訓練を自ら企画している学生もいるなど、新しい防災の形を工夫を凝らして生み出してくれています。

ラジオ局を拠点に広がる地域の輪を、ここ「葛飾」から皆様と一緒に発信できると嬉しく思います。



←葛飾防災劇団の方々

↓金町在住 東京理科大学の学生
レポーター



出演してくださっているゲストや学生のいきいきとした笑顔！

☞ P.61 上平井中生も出演！

たまり場カフェ・葛飾

～自分が思っていることについて話し合いみんなで形にする場所です～

松島 義雄

たまり場カフェ・葛飾

たまり場カフェ・葛飾は、毎月第四日曜日葛飾区立石地区センター別館・勤労福祉会館で 18 時 30 分から開催しています。参加費は無料です。協賛金で運営しています。

- ・誰でも自由に参加できる場所
- ・自由闊達・本音で話ができる場所
- ・相談ができる場所
- ・意識を高める場所
- ・ストレス発散の場所
- ・自分が考えるイベントが開催できる場所



「最新デジタル技術で、災害から身を守る」

(2019 年 3 月 24 日、講師：古川 修氏)

直近のイベントは、三回にわたる防災です。葛飾区立石地区センター別館・勤労福祉会館で開催しました。

第一回は、11 月 25 日（日）

異常な豪雨から命を守るには、区の対策を聞く

講師 葛飾区危機管理課 長谷川 豊課長

第二回は、12 月 16 日（日）

急な大雨に備えて

講師 東京管区気象台気象防災部気象防災情報調整官 川嶋 徹

第三回は、3 月 24 日（日）

最新デジタル技術で、災害から身を守る

講師 株式会社キャドセンター企画室プランナー 古川 修

詳細は、URL：<http://www.tamariba-cafa.net/> をご覧ください。

初めての「輪中会議」に寄せて

～父の遺した店舗を中間共同体的要素をもった場所にしたい～

鈴木 ひろみ
スズキのデザイン

お恥ずかしい事に不勉強で、今回「輪中」という言葉を初めて耳にしました。私は、江東区砂町に生まれ、その後東新小岩に、家は自営の小さな紳士服店で、昭和の昔の、まだ活気ある商店街で育ちました。

幸いにも災害の危機を直接経験せずに過ごしてこられましたが、小さい頃から地震や水害の恐さに敏感に反応してしまうところがありました。

十年以上前に父は他界しました。服の在庫品を沢山残したまま、シャッターを閉めて数年が経ちます。震災後から、店や品もの達を全て処分するのではなく、それらを使って、この場所で何か出来ることはないだろうか。面白くなる方法はないものかと考えていました。最優先にお金を自己目的化しない仕事、今までのやり方とは違う「はたらく」をデザインすること？ オルタナティブな思いは拡がるけれど、なかなか簡単にはいきません。老朽化した建物の不安やシャッター通りの現実もあって。当然厳しく費用はかかりそうだし。

半ば途方に暮れながら、コミュニティ講座やシンポジウム、まちづくりのワークショップに、本質行動学のセミナーなど、とにかくこれは！ と思うものに足を運ぶ日々が続きました。

そんな折に、「中川七曲りから親水都市へ」の講演会に出合い、地域と川との深い関わりや歴史を聴講して、そしてこちらの「輪中会議」の活動を教えていただきました。

防災意識の啓発と街づくり、成人まで育ったこの新小岩北地区で、生活活動される人々の知識や経験を共有するコミュニティがあるなんて知りませんでした。背中を撫でられ、そしてポンと押されたような気がしてなりません。

これからの具体的なアウトプットは、じっくり詰めていきたいと思いますが、文化的な繋がりや、小さいながらも中間共同体的要素をもった場所にしたいと思っています。新参者で亡父とは違う職ですが、商店街のお店の方々とも少しずつ連携が出来たらと。

そこに「しんすい」に関する何か防災の要素を、今後「輪中会議」の皆さま方の活動から拾えたらいいなあと思います。頭の中の理想ばかりを述べました。どうなる事かわかりませんが、まずは災害対策のお店の改装と、そしてもっと地元のことを知るところから、始めようと思います。

輪中フォーラムに参加して

～私も「防災・減災」の課題に取り組んでいきたいと思う～

久保 欣一

かつしか区民大学 区民運営委員

私は昨年から、カスリーン台風で被災し、防災・減災に積極的に取り組んでおられる中川栄久東新小岩7丁目町会長様のご縁で、参加させていただきました。今回のフォーラムに参加して感じたことなどについて述べてみたいと思います。

まず第1の点は、17年余にわたって、町会、NPO、専門家、行政が大規模水害に備える活動、研究を進めていること、子供から大人、老人まで全世代対応で大切な「親水・浸水・まちづくり・人づくり」の問題に取り組んでいることに非常に感心しました。具体例としては、毎年、小学生・中学生は学校でプールにゴムボートを浮かべの訓練、町会では、行政の許可を得て、中川、隅田川等で、ゴムボートでの訓練を行っていること。他地区には稀にない先進的な取り組みだと思います。

第2点は、参加者の宇田川弘様は76歳で一念発起、「防災士」の勉強をし、資格を取得しました。毎年、ご自分の町会の防災訓練を企画実施し、昨年9月1日の葛飾区主催の総合防災訓練にも参加しております。文字通り「安心・安全のまちづくり」の実践者の一人です。

第3点、私自身は、2017年、9月6日に江東5区の大規模避難のフォーラム、18日の葛飾区のフォーラム、2018年3月の輪中会議、6月10日の水防訓練（P.17）の見学等を経験しました。私の活動としては、2018年9月29日に区民大学で中川様に「中川七曲りから親水都市へ」へのお話をいただき、95名もの多くの方に拝聴していただきました。その後10月25日の青木区長様との懇談会の折、「輪中フォーラム」「6月10日の水防訓練」等を「官・民一体で進める」ことが大切ではないかという発言させていただきました。

私も中川さんや宇田川さんには及びませんが、葛飾区のアンケートで1番の関心事、「防災・減災」の課題に取り組んでゆきたいと思っています。

上小松町会会館の建て替え ～歴史とともに振り返る～

協力：東原洋子氏（上小松町会 会長）、濱野祐子氏（同 広報担当）

取材・文：南 貴久（NPO ア！安全・快適街づくり）

新小岩北地区の東部に位置する上小松町会は、1933 年（昭和 8 年）に発足し、戦後の GHQ 命令による一時的な解体を経て 1957 年（昭和 32 年）に再発足し、現在に至っています。上小松町会の区域には、別稿（P.74-75）でも紹介している東京都第五建設事務所の「古井戸」が位置しているほか、町会会館には満潮時の水位や浸水想定水位の表示がなされており、町行く人々に地盤沈下の歴史や現状を伝えています。



解体直前の上小松町会会館
（2019 年 5 月 13 日撮影、
上小松町会 濱野祐子氏提供）

さて、このたび 1959 年（昭和 34 年）に竣工したこの上小松町会会館が建て替えられることになると聞き、その経緯や今後のビジョンについて、町会長の東原洋子さんに取材を行ってきましたので、その際に見せていただいた貴重な資料とともにご報告したいと思います。

1. 上小松町会の 2 度の発足



上小松町会発会式
（1933 年 2 月 8 日）

旧・上小松町会は、1933 年（昭和 8 年）に東京市葛飾区上小松町において発足しました。左の写真は、正福寺で行われた発会式の様子です。当時の上小松町会域は 76 世帯 427 人でしたが、1945 年（昭和 20 年）には約 350 世帯まで増えました。しかし戦後の 1947 年（昭和 22 年）、GHQ の命令により町会は解散を余儀なくされました。

読売新聞の記事¹⁾によれば、現在の町会会館の敷地はこの旧・町会事務所として使

用されており、戦後の町会解散後は消費組合が置かれていました。消費組合は、戦後の食糧難の時期に、上平井消費組合から鮮魚等を仕入れて販売していたそうです。

¹⁾ 『アイデアで建てた町会会館 葛飾区上小松町』読売新聞 江東 PR 版（116）、1964 年 3 月 14 日発行。



上小松集会所・消費組合（1954 年頃）

当時の上小松には工作機械を製造する「大田鉄工所」があり、多くの住民がここで働いていましたが、戦後の経営内容・規模の変更により、いくつかの建物が不要になりました。この際、それらの建物を牛車に乗せてこの地に運んで来て、青年会の詰め所などとして使用していたそうです。これが上の絵の「上小松集会所・消費組合」にあたるものと思われます。

こうした動きが契機となって町会再組織の機運が高まり、1957 年（昭和 32 年）12 月 1 日、現在に続く新・上小松町会が創立するに至りました。

2. 上小松町会会館の建設と活用



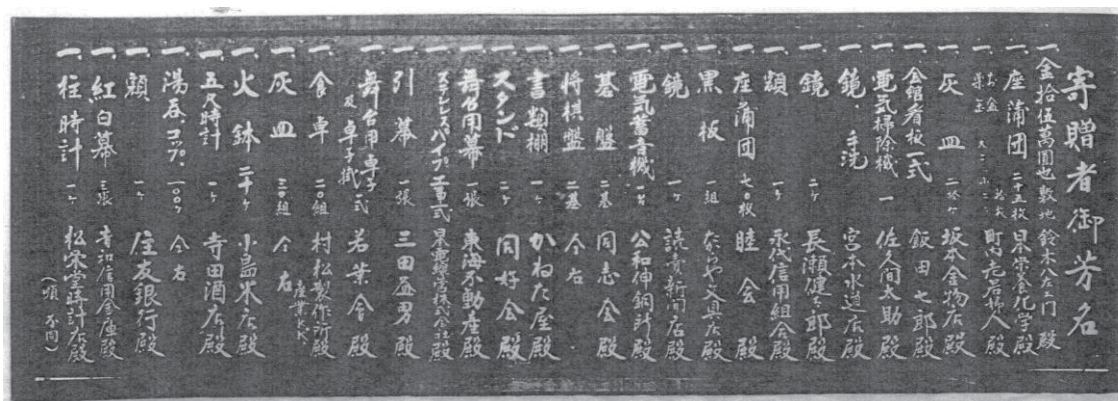
上小松町会会館 落成式
（1959 年 9 月）

町会再発足後、学校の講堂やお寺を借りて集会を行っていましたが、会員数が増えるにつれて手狭となり、新たに町会会館を建設しようという動きになりました。町会会館は、前述の集会所のあった地に建設することになりましたが、この土地は正福寺と上平井の鈴木八左衛門氏の所有でした。このうち、鈴木氏所有分の半分が町会に寄贈され、もう半分は購入し、町会の所有となりました。

しかし、当時の町会は法人格を有しておらず、町会発足時の正副会長 3 名の名義で分有という形となりました。

発足から間もない町会であり、建設費の調達は大きな課題でした。まず、地元の業者や職方を集めて「上小松睦会」を組織して、ここに建設を請負わせることにより、建設費を抑えました。そして、町内の有志から一口 5,000 円²⁾の出資

²⁾ 読売新聞による。『町会五十周年記念誌』資料作成委員会によれば 1 万円。



会館備品の寄贈者芳名板（会館解体後も保存されている）

金を募って 150 万円を集め、さらに会館の 1 階部分に 2 つの店舗（魚屋と酒屋）を作って貸付けることにより、この賃料収入などで残りの 100 万円を賄ったそうです。



町会会館での敬老会（1973 年）

1959 年（昭和 34 年）の会館落成後、二階 40 畳の大広間をはじめとする会館施設の利用は好調で、使用料収入や店舗の賃料収入により、住民からの出資金も数年で完済したようです。大広間は、町会の公式行事だけでなく、婦人会や青少年団体の行事、高齢者が囲碁や将棋を楽しむ場としても利用されていました。東原さんの話によると、このような大広間を備えた町会会館は、

この近辺では珍しく、周りの町会は地区センターや学校を借りて行うような総会や敬老会も、上小松町会では町会会館で行うことができていたそうです（最近では高齢者が増えたため、敬老会は会館では開けなくなったとのこと）。

3. 町会会館建替えの経緯

そんな住民たちの思い出の詰まった場所である上小松町会会館ですが、建設から 60 年近くが経過し、消防からも耐震について危険性を常々指摘されるようになっていました。しかし、会館の建て替えにあたっては大きく 2 つの障壁がありました。名義と資金調達の問題です。

名義については、先述の経緯から、建物が初代会長の三田甚一氏、土地が三田氏などの 3 氏および正福寺の名義となっていました。町会発足 50 周年を契機に、このうち個人所有分を、新たに法人格を取得した上小松町会の名義に変更しました。さらに残りの正福寺所有分についても、今から 2 年ほど前に購入し、すべて町会名義となりました。



町会会館最後の町会総会
(2019年4月26日 2階大広間にて
濱野祐子氏提供)

また、資金調達については、町会費から建替目的で何十年にもわたって積立を行ってきたそうです。それと行政の補助金を合わせて、建設費をなんとか確保できたため、今回東原さんがゴーサインを出したとのこと。特筆すべきは、前回の建設のときとは異なっていて町内からの出資や寄付は受けず、すべて自己資金で賄っていることです。東原さんは、「今はもうそういう（有志の寄付をお願いするような）時代ではないので」と、地道に資金を貯めてきた意義を語ってくれました。

1. 防災“も”地域活動“も”…次代への継承 ～水位表示“も”残す～



上小松町会会館の2つの“水位表示”

(2019年5月13日、撮影：南)

町会会館はカスリーン台風後に建てられており、直接大きな水害を経験してはいませんが、上小松町会会館には水害リスクを伝える2つの“目印”がありました。

一つは、看板の水位表示です(左の写真)。会館前に建てられたポールに、海拔0mの位置や荒川決壊時の予測水位などが示されています。さらに、建物本体の2階には、東京湾高潮予測水位も示されています。これらは、町内の加藤工務店の

加藤さんという方が自主的に作ってくださったものだそうです。

もう一つは、建物に直接つけられた線です(右の写真)。これは2～3年前にNPO ア！の山上さんが知人に依頼して、東新小岩七丁目町会の会館とともに測量してもらい、中川のテラスと同じ高さの位置に東原さんが自らつけたものだそうです。

建物につけられたものは、建物の解体とともになくなってしまいましたが、ポールはそのまま残してあり、新しい会館が経った後も引き続き、地域に水害のリスクを伝える指標として使われ続ける予定です。中川テラスの高さを示す線についても、「新会館が建ったら、ぜひもう一度測量しましょう」と山上さんが話していました。

また、上小松町会には、町会 50 周年記念の際に住民から集めた膨大な記録写真が保存されています。本稿では町会会館の歴史に関わるものをいくつかお借りして掲載させていただきましたが、ほかにも昭和から平成にかけての地域行事の記録や街並みの変化など、図書館でも得られないような、次代に引き継ぐべき貴重な資料がたくさんあります。上小松の歴史についての資料を見たい方は、ぜひ上小松町会に問い合わせしてみてください。

町会会館は 5 月中旬に解体され、現在は更地になっています（町会事務所は建て替えの期間、別の場所に仮移転）。新しい会館は 2020 年（令和 2 年）1 月に完成し、2 月には町会事務所が移転するそうです。

新しい会館は、これまでと同様に 2 階建てで、1 階に事務所や倉庫、2 階に大広間などが設けられる予定です。東原さんは、「できれば子どもたちや若い人にももっと会館を使ってもらいたい。若い人が『こう使いたい』というのがあれば、声をかけてもらえればいつでもお貸ししますよ」と話していました。

60 年余りの歴史を持つ上小松町会。新たな会館で、地域のさまざまな人や活動が交差する場として、今後もさらに末永く歴史を刻み続けて行くことを願っています。

参考文献

- ・『アイデアで建てた町会会館 葛飾区上小松町』読売新聞 江東 PR 版 (116). 1964 年 3 月 14 日発行. (『五十周年記念誌』 p.82-83 に掲載)
- ・『五十周年記念誌 わが町上小松のあゆみ』上小松町会・編. 2005 年.



解体直前の 1 階事務所部分
(2019 年 5 月 13 日、撮影：南)



更地になった上小松町会会館の跡地
(2019 年 5 月 30 日撮影、濱野祐子氏提供)